

心膽練磨
筋伸暢

弓術獨習指南

完

075173-000-3

187-286

弓術獨習指南

南川 正雄 / 編

M36

CEM-0074

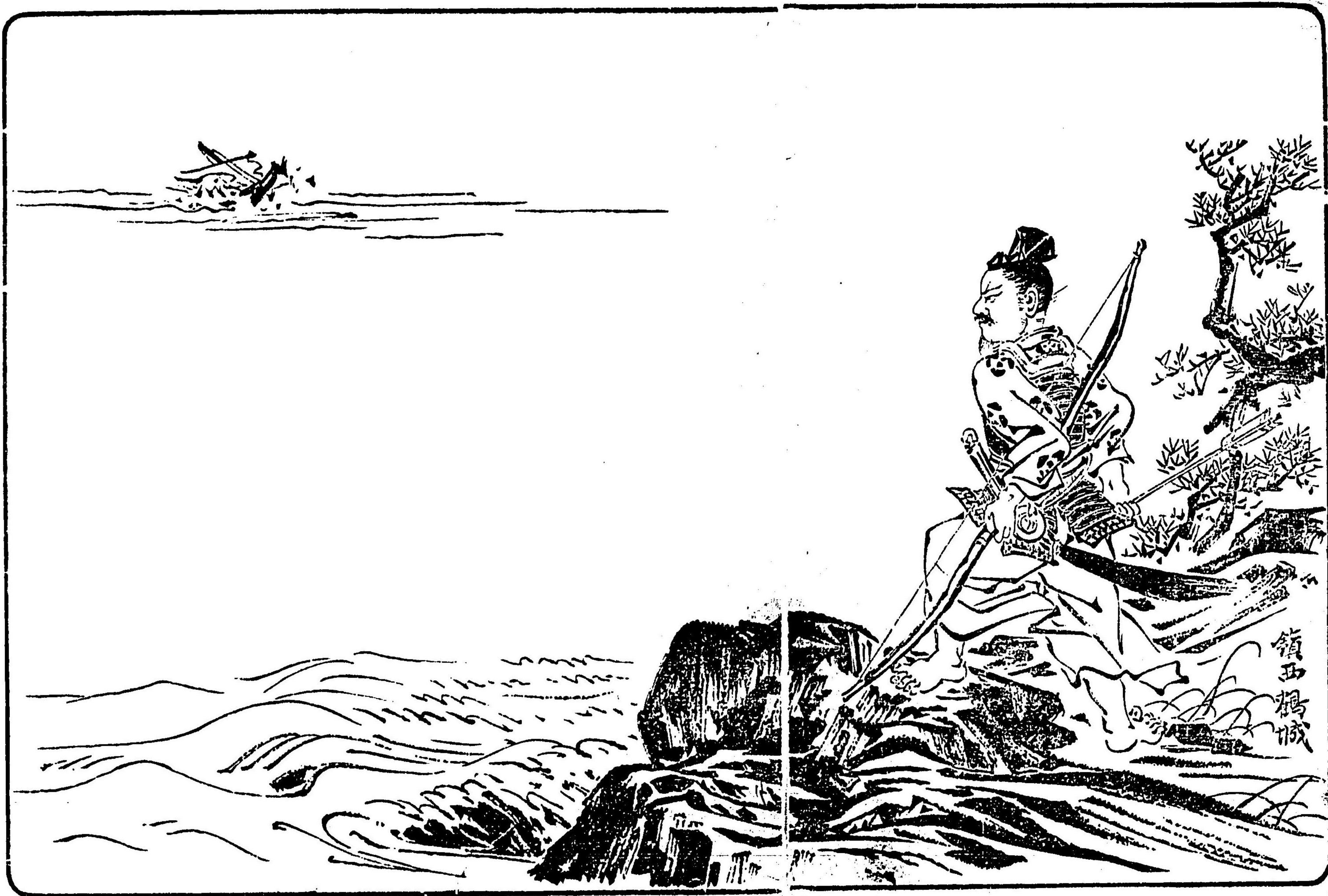


貴族院副議長黑田侯爵閣下題字
武德會副會長長木下廣次君題字
京都大學總長

心膽
練磨
筋骨
伸暢

吾亦獨習南

南川正雄翁編輯 鼎立堂梓



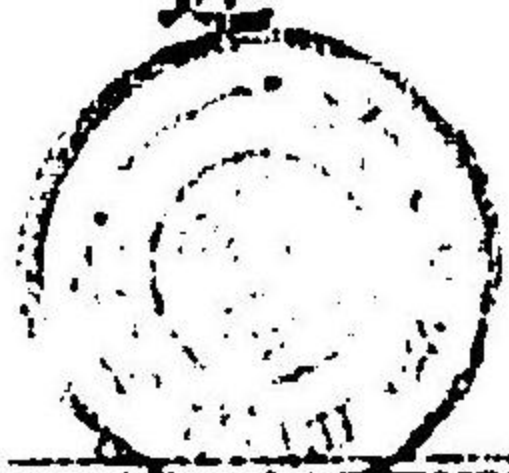
領西鶴城

弓術獨習指南



言

南川正雄編述



禮記曰射者進退周旋必中禮中心正外射直然後持弓矢審固持弓矢
 審固然後可以言中是觀德行矣
 後發發而中不怨勝己者反求諸己而已矣
 夫射術是古之火砲
 の未だ發明なき時代に於ては吾邦武門の最大要具にして其技術
 は諸の武技の首位に在り武門を稱して弓矢の家と云ひ武士を呼
 んで弓執りの士と云ふ其技たる高尚にして其動作は禮節を視る
 に足り其心膽は威武を視るに足る此時に於ける射術の旺盛なり
 し光景は實に以て想見すべし今や之を軍陣に用ゆるの要なしと
 雖とも之を躰育或は娛樂の一技として其功の顯著なるを視る上

み頭首より下も手足に至る渾ての身軀を運動し筋骨を伸長し又
た發射する毎に胸膈を開く因て能く食物を消化し食料を加ふ又
た手足を動作し滿身の神氣充漲するを以て血液の循環を快通し
肌肉を肥大にす之を或は骨弱貧血の人に試るに皆な宿痼の病根
を絶滅すること恰かも流水の汚泥を洗ひ箒の塵芥を掃ふか如
し之を幼者に學はしむれば筋骨の發育を扶け座作進退は禮節に
適ひ神心を靜肅にし勇大の膽力を養ふの功あり之を老壯の士に
執らしめて身体の衰弱を回復し血肉を張大にし勇氣を鼓舞す視
よ歐米人は日毎に時間を吝まらずして運動に用ゆるの好習慣をな
すを以て其軀格は長大にして健剛なり吾か邦人は終日膝を曲け
て座して職を執り運動の定則なきより終に其軀軀は發育を妨け
られて骨骸倭少となり肉瘦せ色青し嗚呼今にして之を改良せさ
れば吾か同胞の將來は果して奈何ん今や學童又は紳士の遊戯或

は躰育の一技として世に採用せらるゝと雖とも其規矩法則を知
らすして徒らに之を學ぶも其道に達することなし是れ編者か此
編を著述し斯術を學ぶ後進子をして一讀して其規矩法則を會得
するの便に供す

凡例

一編者は幼時より明治元年の頃迄今村彌次右衛門と云ふ福岡藩の師範家と垣根を接したりしを以て旦夕此技を學ぶの便あり加之吾性弓矢を執る事三度の食事よりも好みければ殆んど十數年の間弓矢を執らぬ日とは無かき今や此技に詳しき人世に乏しきに至り終に斯技の規矩法則煙滅せん事を憂ひ己れの拙學を顧みず此編を艸したる所以なり

一編者は日置流吉田大藏派を學ひたれとも此編は専ら日置の正傳に原つき尙ほ諸派の秘法奥傳の短を去り長を採り薄く涉獵して射術の法則を輯集したるものなり

一由來師家は初傳及目錄免許と號し斯業の習熟練達の上進に従ひ順次に其門下生に允許を授與せされは之を緝く事を許さ

りしかは廣く世に公にする事能はもた加之其秘書は初學の人解釋し易からざるもの多く皆を其説明口述を俟あされは悟り易からざる異文單語等なり故に余は成るべく平易に初學の人の一讀して其意味を識別し易きを旨とし其傍らに振假名の訓讀を附したり

一方今的前の射は一の遊戯及躰育として紳士學童の間に弄ふ人多きに至りたれとも其師に乏しく偶々師に就き學ぶも數年經歷の時間に僅に一二の條項を其思ひ出すに任かせ不秩序に唯口頭にて教へ傳ふるに過ぎさきは輒やすく其全般の規矩法則を窺知するを能はず本編は此究窺なる不便を蟬脱せしめんと欲し其規矩法則を秩序的に釐正し一讀明解ならしめ斯藝をして文明界の一技に班列せしめんと欲す若し幸に此一冊子か修學射士の便を得て一讀悟了するを得は編者か望み足れり矣

弓術獨習指南

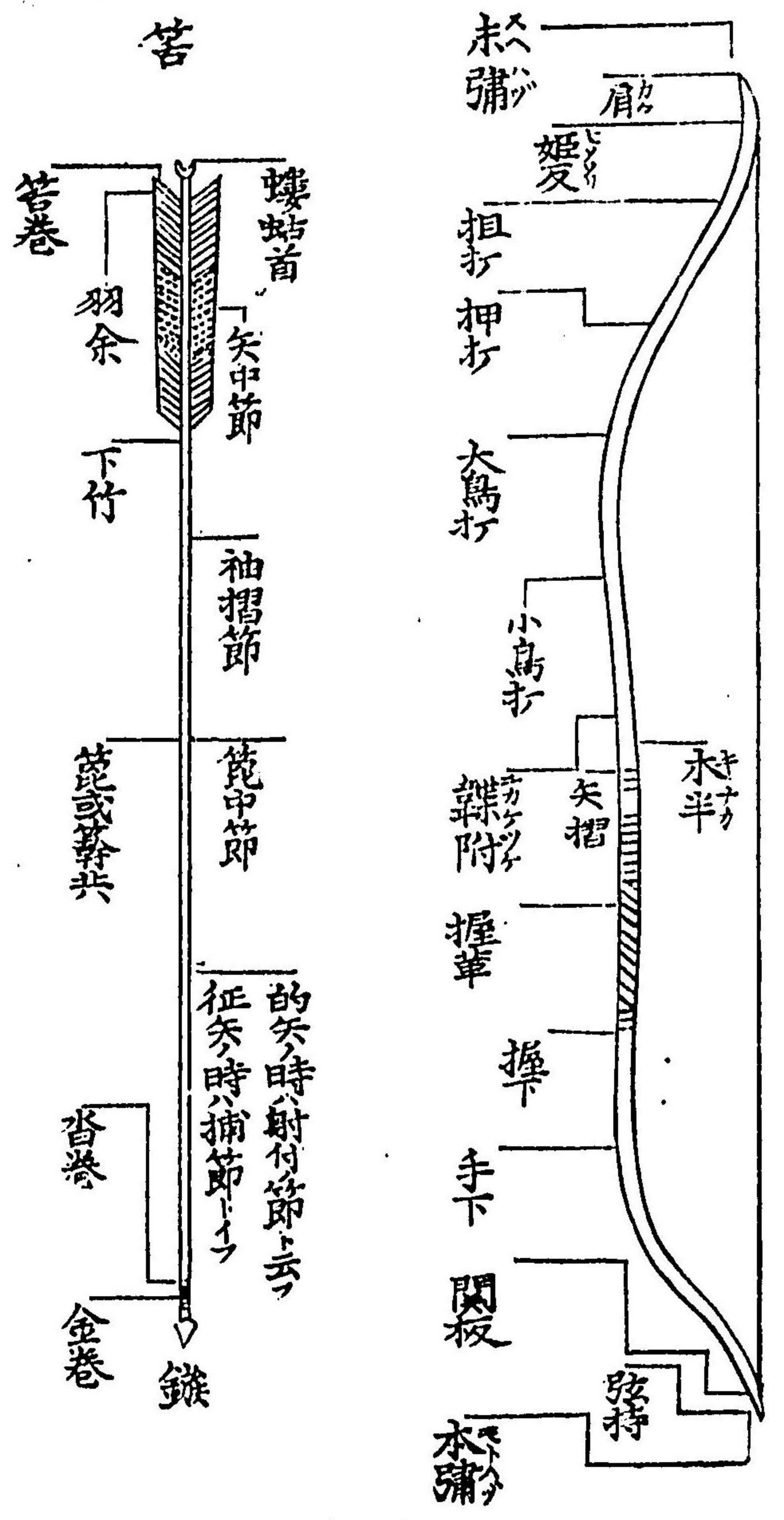
目次

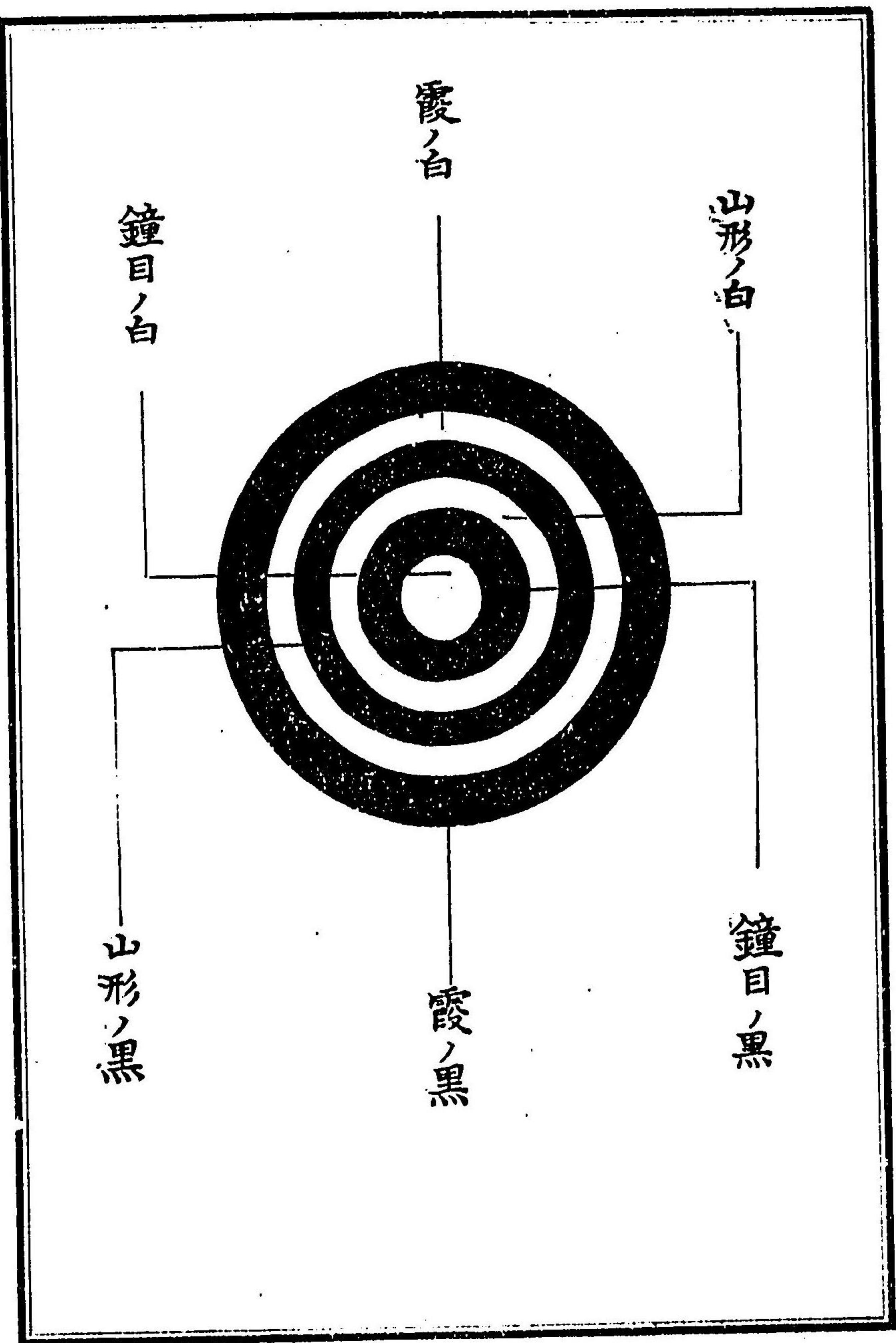
○ 總則		
○ 弓の名稱圖解	六	丁
○ 矢の名稱圖解	六	丁
○ 的の名稱圖解	六	丁
○ 弓矢持つ法の事	八	丁
○ 立場の位置を定むる事	十	丁
○ 的割りの事	十	丁
○ 弓手の肩衣を脱ぐ事	十三	丁
○ 矢番ひの事	十五	丁
○ 足踏の事	十七	丁

○ 的割 <small>てきわり</small> の事	弓搦 <small>きうにら</small> とも云ふ	十八丁
○ 躰 <small>たゝみ</small> 作りの事	胴搦 <small>たゝみにら</small> へとも云ふ	十八丁
○ 物見 <small>ものみ</small> の事		二十丁
○ 打起 <small>たておこ</small> しの事	打揚 <small>うてあ</small> げとも云ふ	二十丁
○ 弦道 <small>しやうだう</small> の事	引込 <small>ひきこ</small> みとも云ふ	二十一丁
○ 見込 <small>みこ</small> の事	規 <small>き</small> ひとも云ふ	二十二丁
○ 押手 <small>おし</small> の事		二十二丁
○ 引手 <small>ひき</small> の事	碟手 <small>しやくて</small> とも云ふ	二十六丁
○ 發 <small>は</small> れの事		二十九丁
○ 肩根 <small>かたね</small> の事		三十一丁
○ 弦音 <small>しやうおん</small> の事		三十一丁
○ 息合 <small>いきあ</small> 併 <small>ひ</small> に調子 <small>てうし</small> の事		三十二丁
○ 氣 <small>き</small> を養 <small>やしな</small> ふ事		三十三丁

○ 銚 <small>しやう</small> 打ち <small>うち</small> の事	三十四丁
○ 退拜 <small>たいはい</small> の事	三十六丁
○ 矢束 <small>やぶ</small> の事	三十七丁
○ 射法 <small>しやうほふ</small> 直方 <small>ちくほう</small> の秘傳 <small>ひでん</small>	三十九丁
○ 初學 <small>しよがく</small> 修業 <small>しゆぎやう</small> 心得 <small>こころえ</small> の事	四十七丁
○ 卷 <small>まき</small> 蕙 <small>ゑい</small> 前 <small>まへ</small> の事	四十七丁
○ 的前 <small>てきまへ</small> の事	四十七丁
○ 弓程 <small>きうぢやう</small> の事	四十八丁
○ 矢程 <small>やぢやう</small> の事	四十八丁
○ 弦程 <small>しやうぢやう</small> の事	五十丁
○ 躰 <small>たゝみ</small> の事	五十一丁
○ 躰居 <small>たゝみい</small> 射法 <small>しやうほふ</small> の事	五十一丁

以上の外大的射法 遠的 堂前 通し物 矢代の式 射禮
 犬追物 掛けの勝負法及藝目軍射の類枚舉に違なきも本編
 は目下行はるゝ的前の必要を掲載するよ過ぎさるなり





總則

日置の傳に曰く射形骨法總体の規矩を豎一横一五重十文字大切三分一十五の大事とす躰の五段八方詰め五緩總体強弱日月身等總てを通して最も肝要なる法則なりとす豎一とは首胸腹の中筋の直なるを云ふ横一とは押手鞞手肩乃横筋の直なるを云ふ五重十文字とは鞞の大指と弦との十文字矢と弦との十文字押手の大指と弓との十文字弓と矢との十文字体と左右手との十文字五重とは重と十の字と兼用して五重十文字と云ふ大切三分一とは矢束を三分し一分は打起一分は弦道一分は引籠みなり此引込三分一を最も大切とするを云ふ十五の大事とは胸に五つ弓手に五つ鞞手に五つの規矩あるを云ふ各後條に説明あり其項に於て知得すへし

或家の傳に曰く吉田上野介道寶射を好くす或時日置彈正正次
矢の根鍛冶彌右工門か家に來り蒼葉形中開葉形熨葉形の鏃三
品を求む彌右工門之れを道寶に告く道寶其鏃の異形にして通
常の鏃と異なるを怪しみ彈正を己か家に招き射事を問ふ彈正
か説く處の射法規矩方正にして悉く其の理も適す道寶其遠く
及はざるを悟り禮を尽し義を正して之れに師とし從ひ射道を
學ぶ事八年終ふ其蘊奥を極め悉く印可を授かる其離別に臨み
住所を問ふ彈正の曰く吾れは常に四州を環ること日月の運行
するか如しとて其住所を語らず故に何所の人なるを知るに由
なし其別れに臨み草津の店にて小臂の反へし三寸の裂きを傳
へて去る后ち七年を経て再たひ四國より道寶か家に來り留ま
ること數日道寶か射術の他に勝れ天下に比なきを賞し悉く其
秘書を傳へて發心し瑠璃光坊威徳と号し高野山に登山すとして

其生國を語らす道寶に秘術奧傳を悉く傳へて爾來吉田流と稱
すへしと云ひて去る實に奇人なり今世諸家の射術は皆な是れ
日置彈正の教傳に出でたるものなりと云ふ小臂の反へしとは
總身一排に誥めの極点に到る所にて押手二の肘の上筋の肉を
前へ捻り反へし鞆手の肱の上筋の肉も前へ捻り反へす意味を
云ふ三寸の裂きとは右小臂の反至極して自然の發れを云ふも
のなるへし

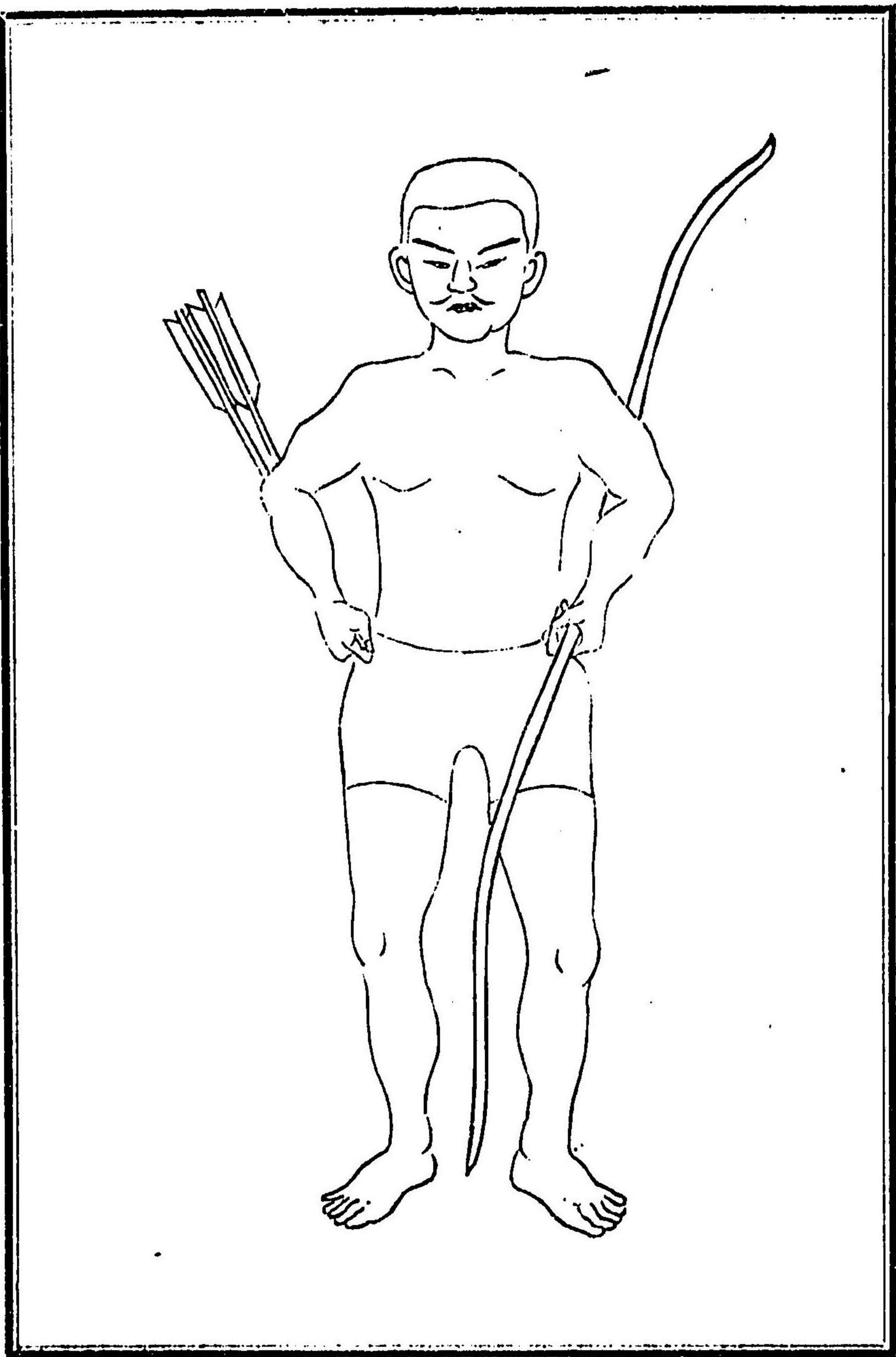
第一 弓矢を持つ法の事

弓の上鉾下鉾を天地と云ひ又本筈末筈とも云ふ先づ左手に弓の
矢摺り籐の少し上を握り逆まに弓乃上鉾は己れか中身の前通
りに下に向け地上貳寸許りを隔てて構へ矢は右手の掌の裏に鏃

伊を握り込み逆まに身の右后ろに少く開きに持ち左右の拳は左
右の腰の帯掛け骨上に當て弓の下鉾と矢の筈と已れの帽子と後
ろへ開きたる形ちは鼎の三足の如くなる左圖を見るへし

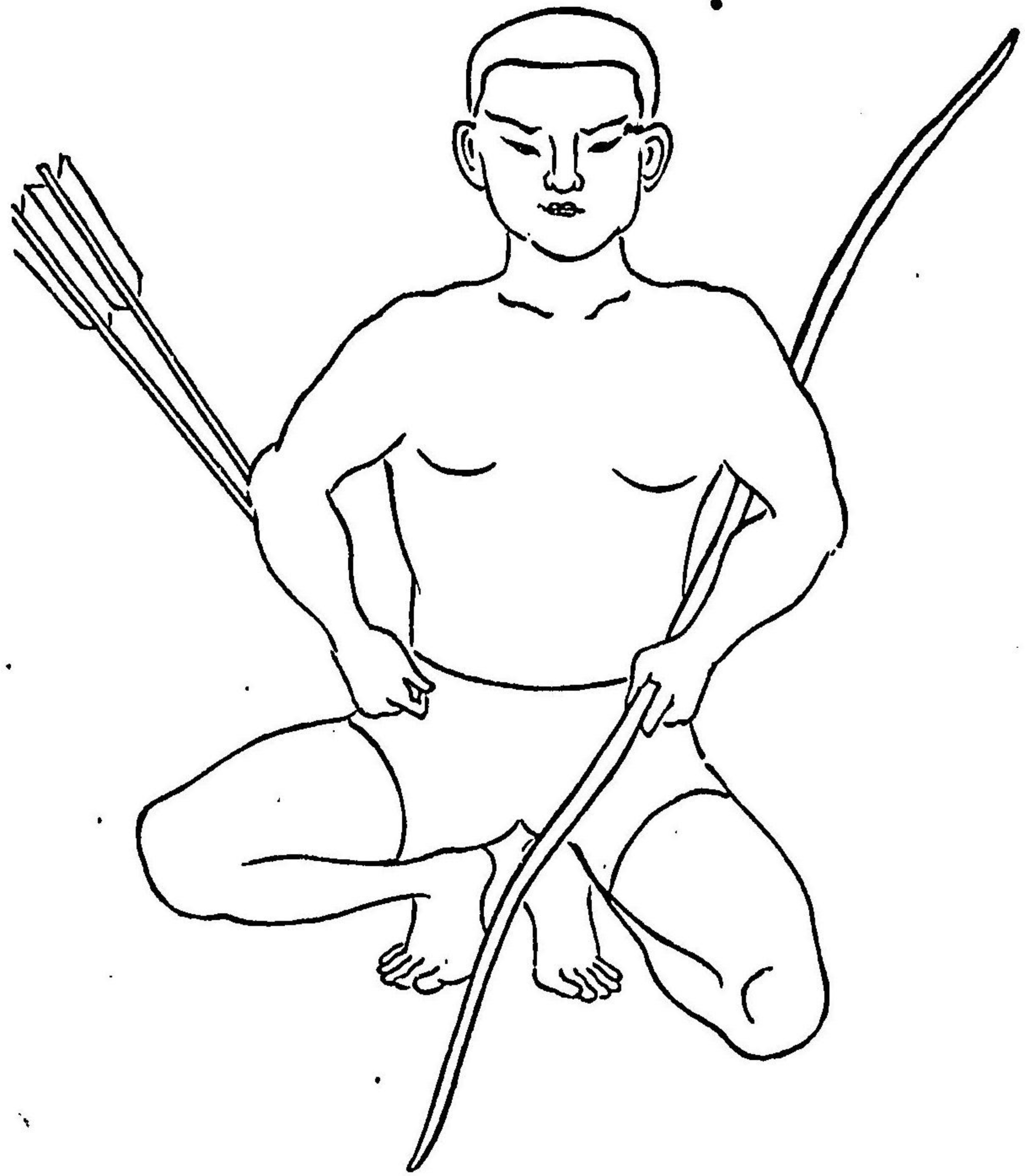
直立の形





第二 立場の位置を定むる事

前條の如く弓矢を持ち立ち場に至り躰は向ふ貴人ひとの方に向つて
両足を踏み揃へて直立し面を左方の的のりへ向け目當物めあたものとの距離と
直線とを認めて下坐したまに折り敷き左足は膝頭ひざかぶを地ちに突き踵かかとを立
て尻しりを上へに据へ右足は膝を立つへし左圖の如し



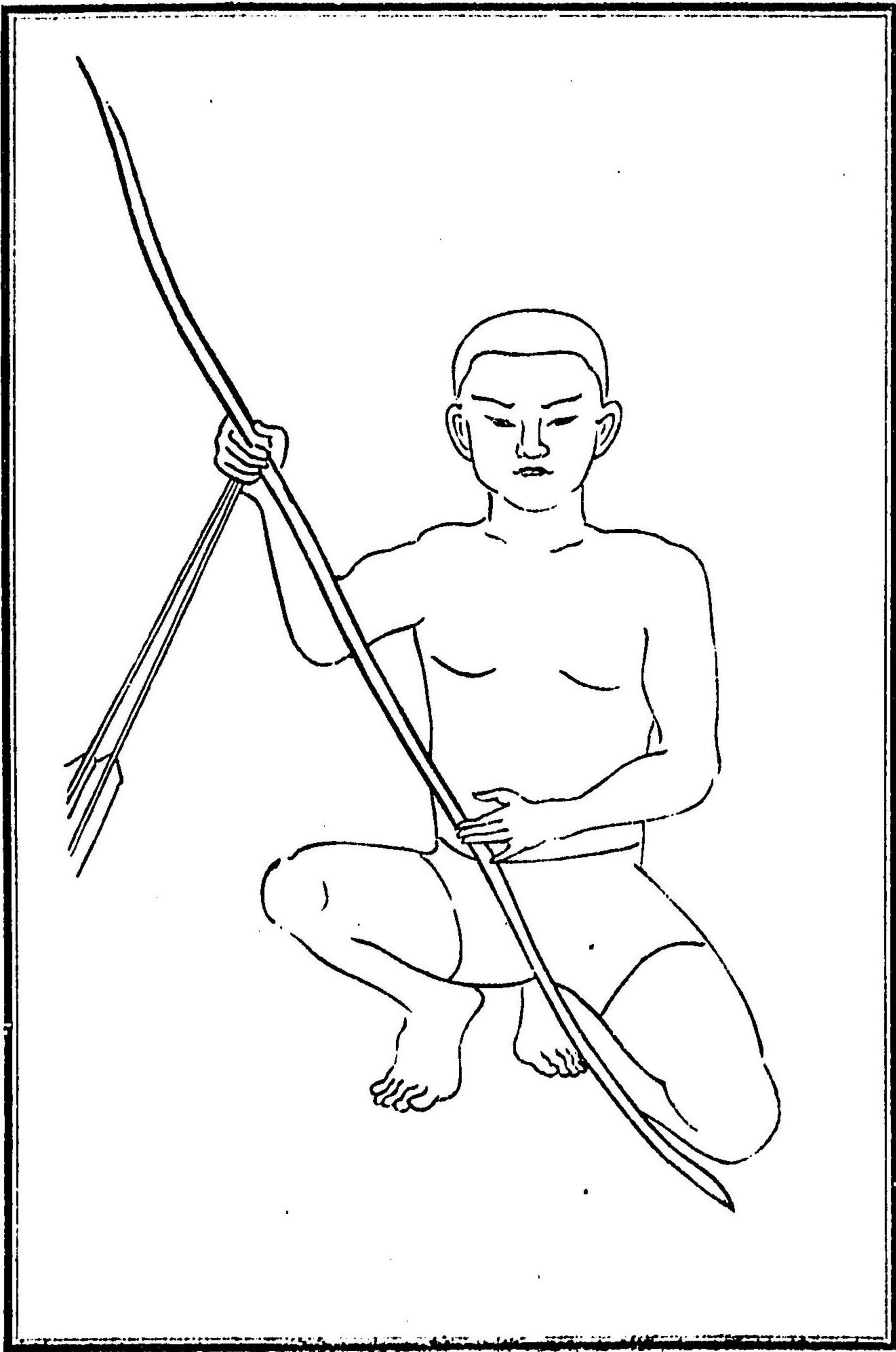
折り敷きたる形



第三 的割りの事

腰を立て弓手を一排に延へ之を的に押當て(是を的割りと云ふ)又元の如く兩踵の上に尻を据へ弓の末筈を左足の内側に立て弓を斜めに倒し右手にて弓の握りの上を軽く執り左圖を見るへし





第四 弓手の肩衣を脱く事

前條の折敷より弓の下銚を左足の内側に立て弓を少し右へ斜めに倒して矢を持ち乍ら右手の拇指と人指とにて矢摺り藤の上を軽く執り左手にて左りの袖口を曳き(左圖の如し)左の手を懐ろ裏へ右へ突入れ左の片袖を脱き

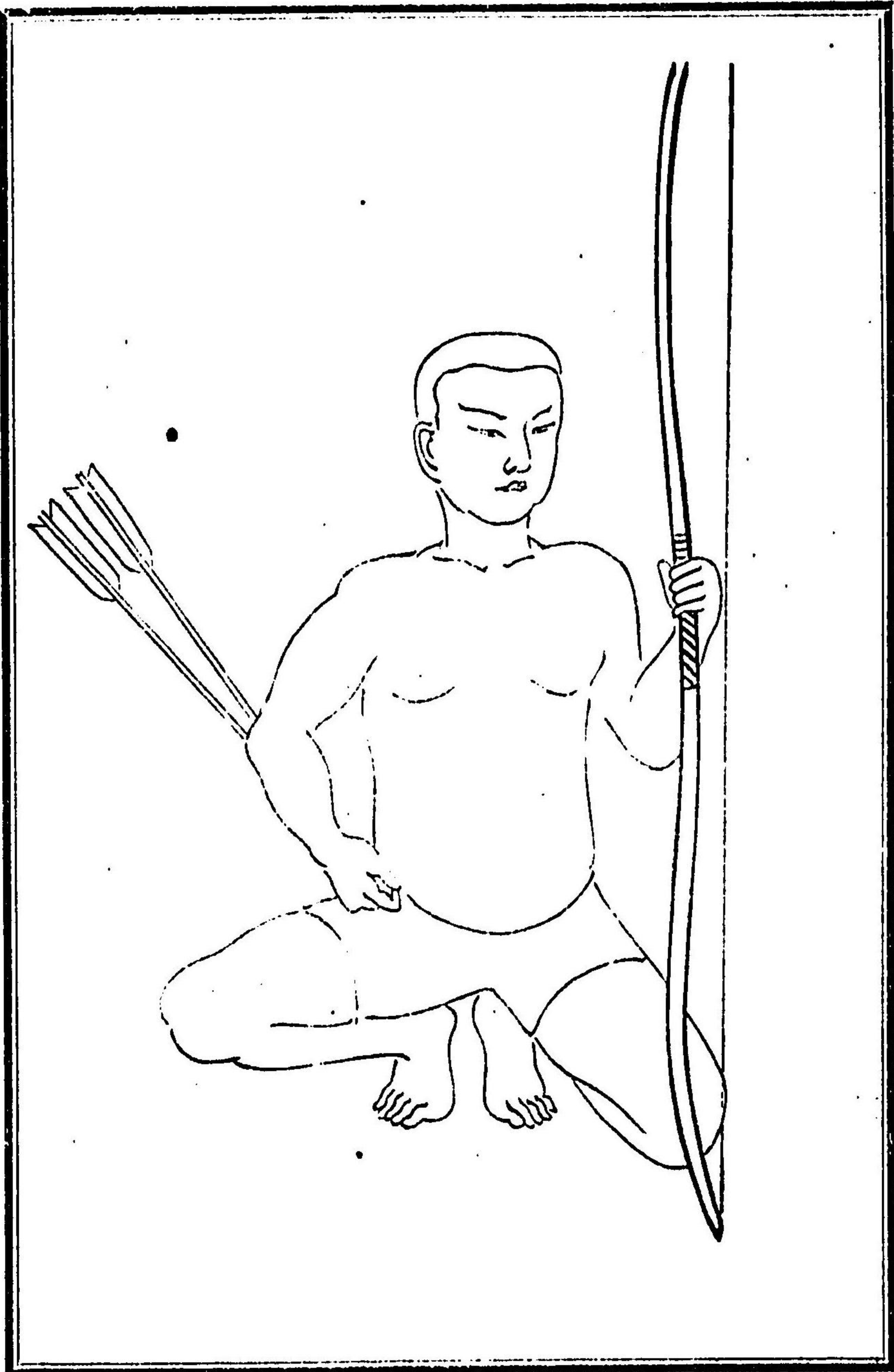
第一圖
袖を引きたる形



其袖は弓手の後ろの方へ垂れ右の手に持たる弓を左の手に執り換へ此時は弓の握りの所を執り弓を左足の内側に立つるなり左圖乃如し

第二圖
袖を脱きたる形





第五 矢番ひの事

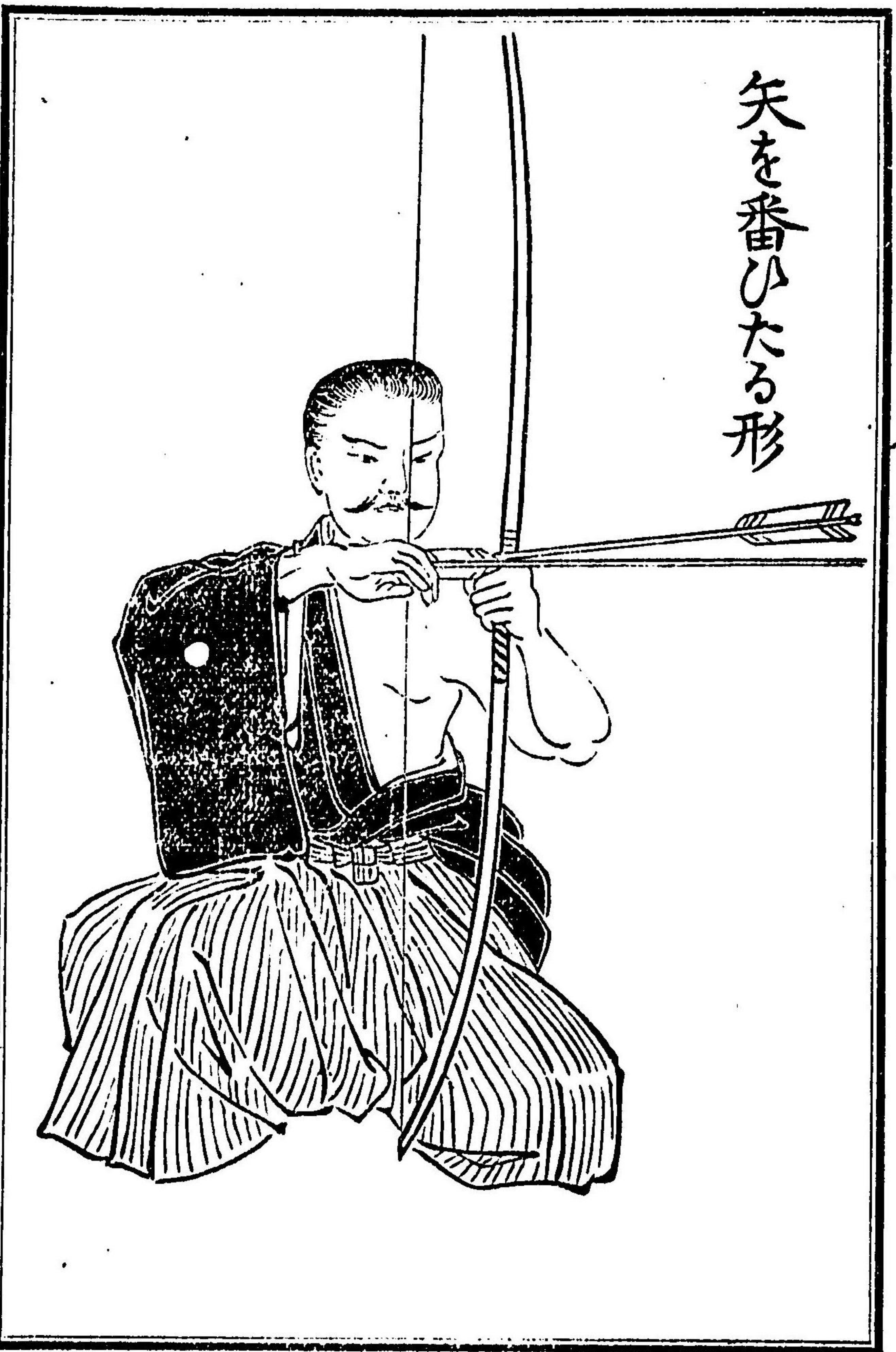
先づ弓の外側にある弦を右手にて内側に回し逆手に持ちたる
 早矢乙矢(早矢乙矢二本を一手と云ふ早矢は羽ぐきの己れの方へ
 向きたるを云ふ乙矢は羽ぐきの向ふへ向きたるを云ふ)貳本を弓
 の外側へ打違へ(左圖を見るへし)

矢を番はんとする形



弦の中仕掛け筈止めの下に矢の筈をはめ乙矢は抜き取り之を逆
まにして打違へに人指に挟み(左圖を見るへと)
弓の握り下大腰の通りに當る弦を右手に軽く摘み足を踏み揃へ
て直立し弓の下筈を左足の膝頭に立て的を見るなり
但し鞆の取組み深ければ筈曲線状に撓みて矢の出荒くなりて
的中に障りを來すなり鞆を下より摺り上げ鞆の帽子の上に乗
る位ひにて筈を少し鞆にて手前に保つ心持をよとす

矢を番ひたる形



第六 足踏の事

先つ直立しての距離及び直線を視計り日
置の傳に足踏の十文字とあるは左右の足と其中
央の体の直立する形を云ふ其的との線に沿ふ
て先つ左足を踏右足も其線に添ひ八文字形に
踏む扇を六七間開らきたる形容なり左足は右
足より少し的の方へ開き右足は線より拇指の
爪丈け向ふ出し少し開く八字の形の如し
下圖に之を示す

八文字足踏の形



此間の技を形容して蜘蛛の己か家を造らんとて將さに網を張らんとするや其前後左右向ふの木にも竹にも目付をして機を窺ひ追風を受けて向ふへ引渡す其働きの迅速なるか如く的の距離直線の見當定まるや否や遲滞なく左右足の配置を爲して左右共に動かぬ様踏しめるなり

歌に 足踏みはもゝよかはりのあるものを

たのか身なりのおのか身の丈

又 足踏みは右をはきひす左りをは

大指つよくふみ詰て射よ

夜中杯目當物の所在を探知するに口傳あり

歌 聲なくは何をあよりに射らまじ

雪降りかゝる芦原の鶯

日置の傳に曰く足踏みは吾か矢束の幅に踏み開くへし八文字

の踏様とて左足は少し内場うちばに踏むなり是れは押手の延ひたる處に従ひ左足を踏み流し懸手の折れある處に従ひ右足を踏み向ふなり射表より見て右足を文字の扁へんにたどへ左足を作りと成る様に踏むなると云へり

又曰く足踏みは其射士の矢束を定則と爲すと雖とも其射士の骨格に依り又は其射術の癖等に應し六つの足踏を應用すへし第一狭く踏めは肩骨指かたほねさし出て矢は下るへし第二肩落過る人には狭く踏ますれば上釣合うしあひあとなりてよし第三廣く踏めは肩骨落ち矢は越すへし第四指し肩の射士には廣く踏ますれば肩落ち下釣合したあひあと成るへし第五右の足を前へ踏出せし身角みかくに成りて矢は後ろへ着くへし然れども弓手の肩出過きたる射人又は懸手肩より遠く離れたる人には之を用るも可とす第六後ろへ踏む時は片はまりにして付け軽くなり矢は前より出つへし然れども弓

手の肩出ぬ射人には用ゆへし
又最も高く最も低く射る時には足一所に寄せて八文字に踏み
射るべきなりと

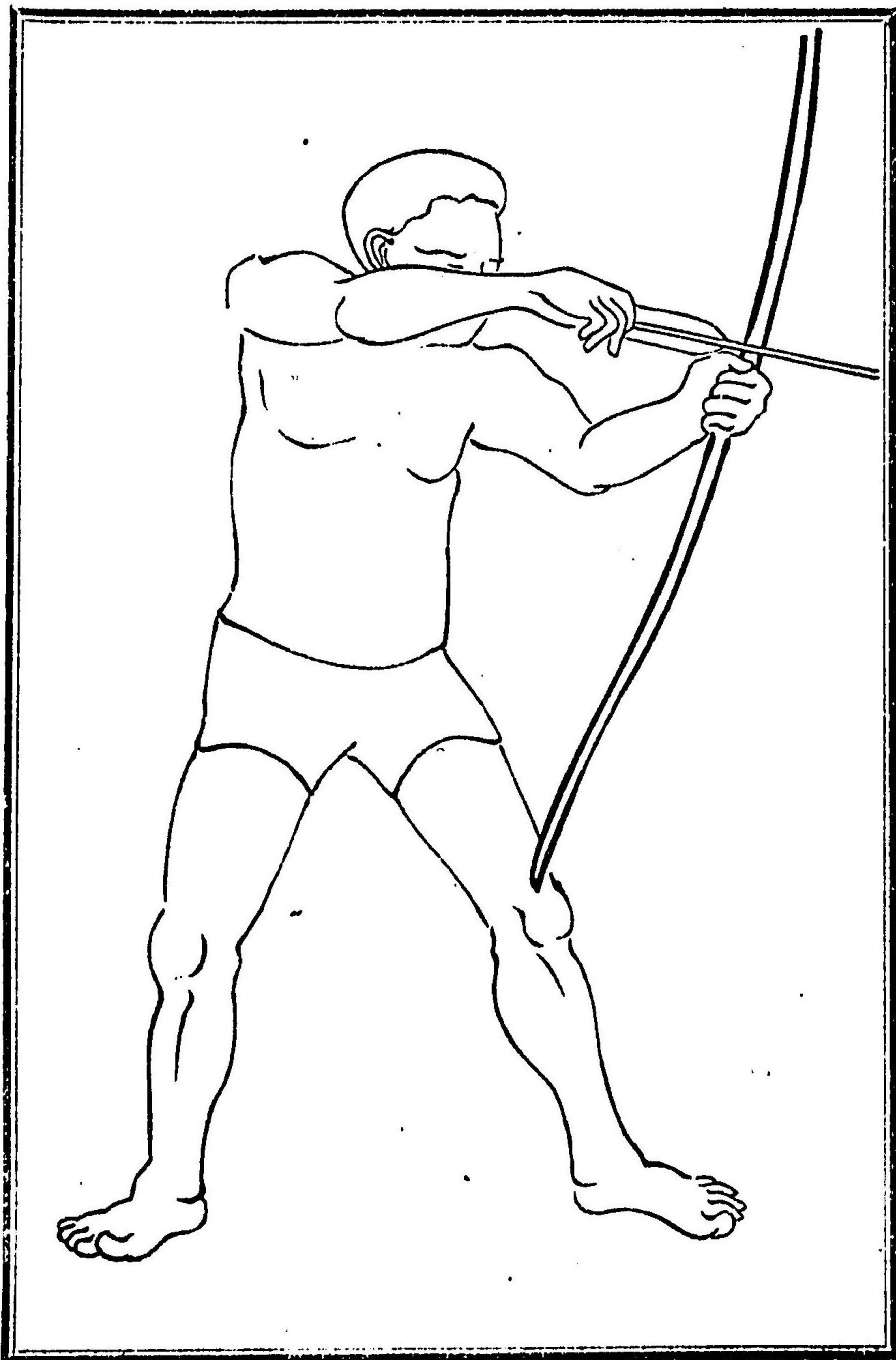
第七 的割りの事 (弓構へとも云ふ)

是れは弓構へして胸に懸手を置き神氣を鎮め目當物を視て足と
肩と弓との三つを的に押當るを云ふ恰も大上の墨指糸を以てす
る如く弓と矢と拳との三つを押當て鏃は少し後ろへ向ふなり

第八 躰作りの事 (胴構へとも云ふ)

先づ右手にて乙矢の鏃を抜き執り之を胴の前に逆まに立掛るか





又は鞅手の小指に逆まに狭み乍ら射るか何れにても用ゆ而して
 足の縮りは左の右足の膝頭の蓋骨を釣り上げ内側に双方より捻ち
 向る時は胸以下は礎上に柱を立てたる如く堅牢なり腰以上は十四
 の骨詰めと云ふて背筋の十四箇の臼骨を下より順次に詰め而し
 て臍の下向ねになる様腹を張り出せば胸は腰骨の上に据へたる
 如くなり躰の全部筋骨締め礎上に堅柱を立てたる如く体格整正し
 て動かさる事山岳の如し

胸の五段と云ふ事あり 直なる胸 掛る胸 退く胸 仰く胸
 屈む胸是れなり掛る胸は張合上へにして付け軽く押手勝ち發れ
 口力らなく矢は下り後ろへ行くへと退く躰は其反對にて弓手
 の拳弱く發れ口縫れ滞りて矢上り前に出るへと反る体は肩骨
 出て緩みて矢も後ろへ着くべし伏胸は張合あれとも居付きて
 悪し然れとも矢と身と遠き人又肩根くつけて發る、人又付下

る射士等には直しの爲めに之を用ゆるもよしとす直なる胴の
少し伏したるを眞の胴といふなりとあり此五体を試みに用ひ
て其得失を知るへし

第九 物見の事

物見とは顔持ちの事なり矢番ひ動作を終へたらは直ちに其眼を
的に移し頭首退かす掛らす仰かす伏さす直に置き其眼は射了る
迄瞳子を動かぬ様見詰めて放つへからす

第十 打起しの事 (打揚とも云ふ)

胴造り崩さす物見の動かぬ様も弓手の肩根を落とし曳手の肩を誘

ひ上げて弓手を突き延へ弓手と擲手と体との間は楯圓形に物を
抱く如くにして肩通りに捧げ弓手の膝下よりの的を見るなり此時
手の揚ると共々氣も昇り体も浮かんとするゆへ呼吸を鎮め氣を
臍の下に沈むる事最も肝要なり

傳に曰く打揚げは月の山の端を立昇るか如くすらくと山の
端の上に昇れば麓は反つて暗くなる如く頭も胴も一らぬ様に
打上げ氣は沈まつて腹の底に落付くへきなり
又曰く四寸の掃へと云ふ事あり鞞の拳と押手の手首との間を
四寸に取る事なり是れ身の横幅の四寸に對するを以て規矩と
したるなり

但し打起しは諸派にて菱形其他種々あれとも本文の楯圓形
最も姿勢よしとす

歌 めあてをはたすきにかけて見る時は

又 あたらすとても外れすとこれ
打渡すうどのかけ橋直くなれや

又 ひき渡すには反り橋をよき
又 弓は父弦は母なり矢は子なり
おもひ合はすは子は育つまじ

第十一 弦道の事 (引込みとも云ふ)

弦道は先つ神氣を静かに前後左右遠近等を見計り引渡すなり
打上けたる其中央より押勝手へ左右等分より反り橋の形ちにして
鞞手は肩の通りを過ぎ行き固く彎き分け左右の肩根は橋の両端
なる石臺の如く浮かす緩ます堅牢なるを要す之を殘身と云ひて
弓に連れて浮き揚らす物におもしを掛る意にて重の口傳なり此

時手首にて彎くを嫌ふ鞞手の拳は素直にして臂先の力にて彎く
押手は弓の内竹の前角より彎くに隨ひて廻り漸次拇指を締め内
竹の中央に止り拇指根締める意なり総て引渡には弦の吾身に近
く迫らぬ様に業は大様に縮小ならぬを好とす又弓懷ろとて弓
を懷に抱く意なり

歌 打起し曳くにしたかひ心せと
ゆみにおさるなさとれ強弱

第十二 見込の事 (規ひとも云ふ)

彎き立の當初よりの細かに見詰むる時わ息詰りの精神を奪
はれ終に諸部の整備を欠き正格の姿勢を失ひ最後の張合勇氣を
失ふに至る之を尽きたる射と云ふ故に眼は初めは博く一休を照

らし氣を臍の下に鎮め順次に其的の星に眼眸を集むるを要す且つ総て的の大きは見込みの漠然となる故太き的は早く的に乗り易く又之を蔑視し見當の大様に成り案外に射外すこと多し必ず大小的共慎重に的に押し當て押鞞手の強弱會合して押合せるを詰ると云ふ此場合は所謂膽は大ならんことを欲し心は小ならんことを欲すの語を服膺すべし

第十三 押手の事

弓と押手と十文字になるを規矩とす押手は弓構への時人指を躍ね或は之を屈めて射るもあれども初心の時は之を躍ね人指を能く伸さゝれば押手の筋骨伸張せず拇指根の股にて弓を向ふへ押し回すなり握り様は拇指先きを中指の先の節の上を押へ漸次彎き

分るに従ひ弓の内竹の手前の角より後の方へ捻る様にして人指と拇指との股の中央と弓の内竹の真中に直りて止めて締るなり而して握り乃上押しり肩根の上部まで線を引き其線の上筋を張り押し押の二の腕を前に折り返すを上段の押手と云ふ手の裏は拇指を人指の先きの節の上へ重ねて強く押し廻すへし無名指と小指は軽く締め掌の裏は空虚を爲して鶏卵を入れて押し破らさる意なりとの教へなり然らされは手の裏の働さなきものなく押手上中下の三段あり上段は前に述べたる如く上筋の線を張るなり中段は押手の中筋の線を張るを云ひ下段は押手の下筋の線を張るを云ふ中段下段は無名指と小指とに力を入れるなり夫れ人各其天性格の屈伸曲直等同一からざるは其面の同しからざるか如し其射人の押手の骨組に従ひ上段を用ゆるに適當ならざるものは中段又は下段を用ゆへし上段を通常の押しとすれとも其射人の

天賦の得性に據り其天性の骨相に逆らはず渾て其姿勢に適はされは其繼興到りかふし又其射人の稟性押強くして蹠手の弱きあり其押手弱くして蹠手の強き骨相の人あり此の如きは其強き方には多く意を用ゆるよ及はずして専ら其弱き一方に心と力とを用ひて之を扶くへし然らされは其左右張り合の平均を保ちかたし總て上中下段共に押しの掌の内は空隙を作り手首の窪み折れざる様に脉筋の通り直なるかよし掌の平らに弓を押すをべた押とて大ひに忌むことなり是れは押し弱く手の内の働きを失ひ弓返り鈍く絃さへす矢の出も定まらず蹠手縫れ解けかぬるものなり手の裏に五種の大事とは十五の大事の内なりきめ過る拳居付く拳退く拳捨り出す拳筋渡りの拳是なりきめ過る拳は發れ居付き或は拳落るの難あり居付く拳は發れに刎ね或は前離れの難あり是れは筋骨の續きよ張り足らさ

る故なり捨り出す拳は發きに平ら發れとて力らなき發れの難あり矢は前に出て手の裏の働らき押し弱くして蹠手に負ける故なり退く拳は捨り廻はし足らずして後へ退き押し弱く發れは身のおまり込み足らず蹠手は前へ浮出て締りなく前發れの難あり又押手の脉筋を弦にて打つことあるへし是れは拳の勢ひ弱く蹠手の釣り合ひ移らすして押の崩る故なり筋渡しの拳は上中下段の線の推し通り脉所の筋の直なる中央の手の裏にて之を最とひ紅葉重ねの手乃裏と云ふ事あり下の小指より段々に指を詰めて上げて指の間透き間なく重なる意を譬へ言へるなり其解釋流派により異れども大同小異なり鱗形の手乃裏といふ事あり弓を筋違ひに握り中央に押廻はす時は手の裏は鱗形になるを云ふ此解釋も種々なり

天賦の得性に據り其天性の骨相に逆らはず渾て其姿勢に適はされは其蘊奥到りかふし又其射人の稟性押強くして蹠手の弱きあり其押手弱くして蹠手の強き骨相の人あり此の如きは其強き方には多く意を用ゆるよ及はすして専ら其弱き一方に心と力とを用ひて之を扶くへし然らされは其左右張り合の平均を保ちかたし總て上中下段共に押し掌の内は空隙を作り手首の窪み折れざる様に脉筋の通り直なるかよと掌の平らに弓を押すをべた押とて大ひに忌むことなり是れは押し弱く手の内の働きを失ひ弓返り鈍く絃さへす矢の出も定まらず蹠手縫れ解けかぬるものなり手の裏に五池の大事とは十五の大事の内なりきめ過る拳居付く拳退く拳捻り出す拳筋渡りの拳是なりきめ過る拳は發れ居付き或は拳落るの難あり居付く拳は發れに勿ね或は前離れの難あり是れは筋骨の續きよ張り足らさ

る故なり捻り出す拳は發せに平ら發れとて力らなき發れの難あり矢は前に出て手の裏の働らき押し弱くして蹠手に負ける故なり退く拳は捻り廻はし足らすして後ろへ退き押し弱く發れは身のをまり込み足らす蹠手は前へ浮出て締りなく前發れの難あり又押手の脉筋を弦にて打つことあるへし是れは拳の勢ひ弱く蹠手の釣り合ひ移らすして押の崩る故なり筋渡しの拳は上中下段の線の推し通り脉所の筋の直なる中央の手の裏にて之を最とひ紅葉重ねの手乃裏と云ふ事あり下の小指より段々に指を詰めて上げて指の間透き間なく重なる意を譬へ言へるなり其解釋流派により異れども大同小異なり鱗形の手乃裏と云ふ事あり弓を筋違ひに握り中央に押廻はす時は手の裏は鱗形になるを云ふ此解釋も種々なり

蓋の手の裏と云ふ事あり是れは卵を拳の裏に握り込み碎けさ
 る程に手の裏の締め加減を云ふなり
 木取りの手の裏と云ふ事あり是れは猿の梢を傳ふ無心の締め
 加減を譬へいへるなり

歌

手の内は竹に藤巻く如くにて

かせに随ひしめゆるめあり

鴈の首彎中といふことある是れは上筋の張りて指先きの下向
 になるに譬へたるなり過くる時は弱となる三指に加減あり一
 つ目二つ目三つ目とは三指をいふ是口傳なり能くく_て 蕪味と
 て會得すへし
 押手の形ち左圖の如し

第一圖 人指を伸べたる形



第二圖 人指を屈めたる形

曳き姿は高さも低きも其金をたかへず前に云へる反り橋の如く又富士山のことくとも云ひて中高く丸く引渡し林の弓にはまりたる様に身を弓と弦とに割り入り背中の蟬の羽骨の双方相會する様にすれば胸の前面も胸膈を開らき矢束の程度に充るなり

押の強弱といふ事あり是れは手の内の口傳にして拳と脈筋との間に在り上に過ぎて下へも前に捻ち出ても後ろへ退きても弱く筋渡しを第一とし尙ほ締め加減にて強弱あるを云ふ

父母大三と云ふ事あり父母とは弓と弦と云ふ是は押蹠手打起して目當物に心を付け押引の二味よて左右平均に遅速なく筋骨の緩まぬ様に思ひ合ひ押手の中骨と蹠手の二の肱とを内側に捻り返すへし弓を向ふへ押付くると同時に勝手も肩骨續目の上は角へ曳付るなり此時蹠手の肩を誘ひ向へて肩へ引取る

なり之を父母とて双方の思ひ合ひを云ふ大三とは三分の一の事にて馬手の味ひなり引渡しに連れて蹠手の拳は右目の眉の通りを越すより肩口の上角へ滞りなくむかど引き付るなり此時にあたり種々の疑念を生せず無心なるを肝要とす此疑念を生ずれば矢束縮み緩みを生し蹠手付けの定所を失ひ後に諸種の病弊を來すを以て此三分一の所を要所と心得へきなり之を大三といふ

歌に 手の内は締めずゆるめず押し付て弓のはたらしき指根にあり

第十四 引手の事 (蹠手とも云ふ)

蹠手の裏の弦と拇指と十文字になすを規矩とす而して少し手首

曳き姿は高さも低きも其金をたかへす前に云へる反り橋の如く又富士山のごとくとも云ひて中高く丸く引渡と昧の弓にはまりたる様に身を弓と弦とに割り入り背中の蟬の骨の双方相會する様にすれば胸の前面も胸膈を開らき矢束の程度に充るなり

押の強弱といふ事あり是れは手の内の口傳にして拳と脈筋との間に在り上に過ぎて下へる前に捻ち出ても後へ退きても弱く筋渡しを第一とし尙ほ締め加減の強弱あるを云ふ父母大三と云ふ事あり父母とは弓と弦と云ふ是は押磔手可也して日常物に心を付け押引の二味よて左右平均に速速なく筋骨の緩まぬ様に思ひ合ひ押手の中骨と磔手の二の肱とを内側に捻り返すへし弓を向ふへ押付くると同時に勝手も肩骨續目の上は角へ曳付るなり此時磔手の肩を誘ひ向へて肩へ引取る

なり之を父母とて双方の思ひ合ひを云ふ大三とは三分の一の事にて馬手の味ひなり引渡しに連れて磔手の拳は右目の眉の通りを越すより肩口の上角へ滞りなくむかと引き付るなり此時にあたり種々の疑念を生せず無心なるを肝要とす此疑心を生すれば矢束縮み緩みを生し磔手付けの定所を失ひ後に諸種の病弊を來すを以て此三分一の所を要所と心得へきなり之を大三といふ

歌に 手の内は締めずゆるめず押し付て弓のはたらき指根にあり

第十四 引手の事 (磔手とも云ふ)

磔手の裏わ弦と拇指と十文字になすを規矩とす而して少し手首

を内側に捻り矢の懸れさる様保ちて引越すへし是れ乃ち五重十文字なり此時手首は和かに凝りなく手首の下に窪み曲るは悪し手首より臂迄直線にして手先に力を入れずして臂先にて彎くへし押手の捻り廻し締ると同時に蹠手も臂先を後ろへ引廻し締め詰るなり蹠手の附け所は肩骨の少し上角をとしとすれども射人各天稟の性骨格の異なるあり身体より遠く離れて肩骨に附かぬあり此の如きは右の足踏みを線より内に入れて踏ましむれば肩に近づくへし又蹠手の指し上かる人は足踏みを定則より廣く踏ますれば肩落ちて下た釣合となるへし其人の天性骨相筋道に従ひ上下前後を適當に用ひされは反つて無理となり其体格の整正を失ふて諸部の締め五部の詰め充分に到らぬなり是れ人々其形体姿勢の同じからざる所以なり之を知らざれば幾千万の矢敷を重ねて修學するも其蘊奥を知得する事なかるへし

○五部の詰めとは 剛詰

(剛は弓なり) 懸詰 (懸は弦なり)

右肩詰 左

肩詰 胸詰なり

○重と云ふ事は始中終の三身共最も肝要の重もみ強みなり渾て浮き上らす胸より以下に力の沈重なるを云ふ手先きの小業にならずして腰の詰め緩まぬ様胸の力を原とし手足に及ぼすへきなり

○肱力の事大事なり曳き納めて臂先きを肩の後ろの蟬の羽骨の下に合ふ様に詰めるにあり張肱も下り眩もあし又平ら付とて臂の捻り廻り足らされは蹠手の首平ら付けになる是れにては蹠手の詰めは極らず締りなかり総て發れの前に緩み出る癖あるは肱先の力から抜けたるなり

歌に 矢束ほど曳て味はへ心なく
つるにひかるな肱の力よ

を内側に送り矢の眼にさる候保ちて引越すへし是れ乃ち五重十
文字なり此時手首は和かに凝りなく手首の下に強み曲るは悪し
手首より臂迄直線にして手先に力を入れずして臂先にて彎くへ
し押手の捻り廻し締ると同時に蹠手も臂先を後ろへ引廻し締め
詰るなり蹠手の附け所は肩骨の少し上角をとしとすれども射人
各天稟の性骨格の異なるあり身体より遠く離れて肩骨に附かぬあ
り此の如きは右の足踏みを線より内に入れて踏ましむれば肩に近
つくへし又蹠手の指し上かる人は足踏みを定則より廣く踏ます
れば肩落ちて下た釣合となるへし其人の天性骨相筋道に従ひ上下
前後を適當に用ひされは反つて無理となり其体格の整正を失ふ
て諸部の締り五部の詰めの充分に到らぬなり是れ人々其形体姿
勢の同じからざる所以なる之を知らざれば幾千万の矢敗を重ね
て修學するも其蘊奥を知得する事なかるへし

○五部の詰めとは

剛詰

(剛は弓なり)

懸詰

(懸は弦なり)

右肩詰 左

肩詰 胸詰なり

○重と云ふ事は始中終の三身共最も肝要の重もみ強みなり渾て
浮き上らす胸より以下に力の沈重なるを云ふ手先きの小業に
ならずして腰の詰めの緩まぬ様胸の力を原とし手足に及ぼす
へきなり

○肱力の事大事なり曳き納めて臂先さを肩の後ろの蟬の羽骨の
下に合ふ様に詰めるにあり張肱も下り肱もあらし又平ら付と
て臂の捻り返り足らされは蹠手の首平ら付けになる是れにて
は蹠手の詰めは極らず締りなきなり総て發れの前に緩み出る
癖あるは肱先の力ら抜けたるなり

歌に 矢束はと曳て味はへ心なく
つるにひかるな肱の力よ

○比人双と云ふ事あり弓構へとり打起し迄を比の位ひと云ひ引立より三分一迄を人の位ひと云ひ彎き治りて押手蹠手左右の手肩共に一文字の規矩に合ひたるを双の位ひと云ふ比の字は字の如く左右の手肩共に陸に構へて打起したる姿勢にたとへ人の字は引渡す姿勢に譬へ云へるなり

○抱惜と云ふ事あり抱へ保もつ調子の事を云ふ調子は早きを嫌ふなり抱へ保ち發れを惜む意味あるへきを云ふ然れども此加減こそ最を味ひの肝要なる所なり的中不的中の在る所五部の詰め至極する迄にて抱へ程度を過れば十五夜の満月も是れより欠くる如く諸部の力ら尽きて息き合も弱り終に發れの時を失ふなり所謂過ぎたるは及はざるか如きに終るへし

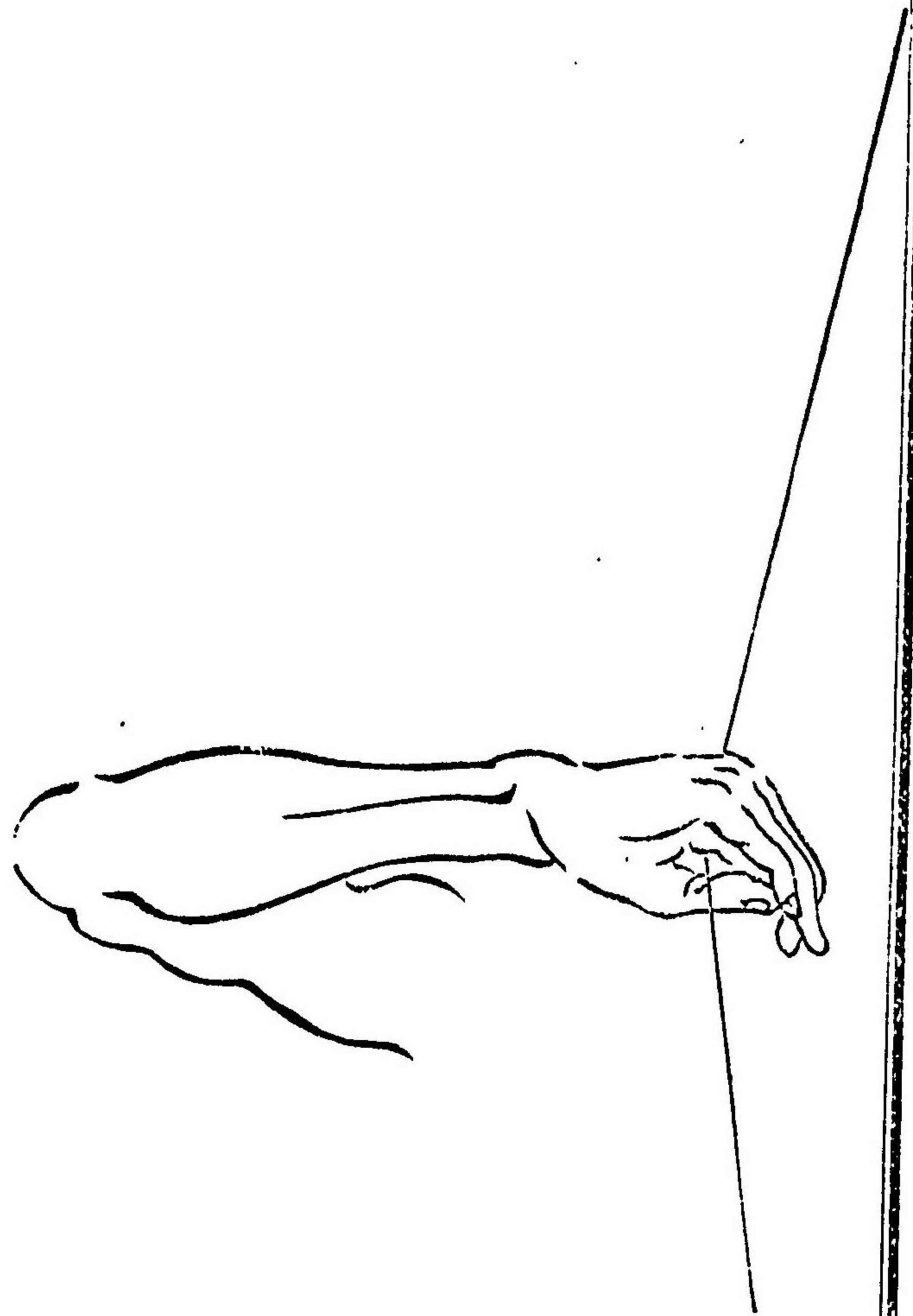
○八方詰と云ふ事五部の詰めに加へて心の詰め肱力續骨と三つを合せて云ひたるなり心の詰めとは身の延ひを云ふ心を大優

よして又たるみなきを云ふ古語に云ふ心は小ならむ事を欲し膽は大ならんことを欲すとは好く此意に適合するなり肱力とは蹠手の肱先きを背後の蟬の羽骨(左右の平骨と云ふ)の相合する様に彎き詰め弦に引き出されぬ強みを云ふ續骨とは二の腕の骨を捻ち返り肱力と共に浮かす緩まぬ強みを云ふ之を合して八方詰めといふ

○延ひに始終の武段あり始めの延ひは引渡すとき胸の開きより首脇左右及び双の肩根二の腕手足の爪先迄延ひるを云ふ終の延ひとは弓を押し開き蹠手を肩口に執りて肱先後ろへ引廻し發れて後も縮まず筋骨の伸張しつゝある様とするを云ふ

歌に
とく曳きて引くを抱へよたもた
つにはなれを弓にしらせぬそよき

○蹠手に五つの大事とは蹠手附け高さに過ぎ低さに過ぎ彎き過



き。彎き足らぬ。中央の定處に治る(是れ十五の大) 高過たかされは蹠手弱
く。肱弱くして。胸發れの難を得べし。彎き過れば蹠先き押へ或は
發れ日戻り或は上は離れの難を得べし。彎き足らぬは蹠強く。珍
り或は手首折れて其發れは電光の如く荒く發れて味ひなかる
べし。中央は其定處に治り筋骨の續き其射人の骨相に適したる
處に治まりて諸部の縮り整ふべし
○總へて蹠手は弦に障らぬ様和らかに解くるをよしとすれども
決して弱きをいふにあらす強く勢ひなければ矢持ちなく弦も
矢も其働きを失ふべし
歌に 弓は父弦は母なり矢は子なり
おもひ合はずは子は育つまど
○蹠手の形は左圖を見るべし

○緩の事一に剛の緩み(押手の内のゆ)二に會の緩み(標の手の内のゆ)三に左肩の緩み(ゆの肩口のゆ)四に右肩の緩み(ゆの肩口のゆ)五に胸の緩み(胸の縮みて張り開かざるを云ふ)何れも大にあしきなり

○矢所九つの事

越し矢下り矢前矢後矢前越し矢後ろへ越し矢前下り矢後ろ下り矢中り矢是れなり

第十五 發れの事

○離れは五部の詰めの充滿し心氣術一致の至極すれば自然に知らず識らすの内に發るゝなり今放つといふ心ありて殊更に放ちては發れといふべからず大いに悪しきなり然れとも發るゝ以前張合はせの時より蹠手の拇指の爪先を外へ彈き出す様に

蹠の帽子の内より迫るなり左すれば帽子は蹠に障らすして解るなり弓にも弦にも知らせぬ様にすらりと抜くるをよしとす此味の妙處こそ其發射の終始の定まる所なり的中すると否とは此發れの如何んに在るなり最も大切に注意すべきなり

一四箇の離れといふことあり切拂別なり切は的前に用ひ拂え遠矢に用ひ別は指矢に用ひ拳は射抜きに用ゆることを云ふ口傳なり

一四寸の發れと云ふは横身四寸の内に發れ治まるを云ふ又四分三といふは發れ蹠手乃肱四分後ろへ分れ開き肩乃通りより三分下るを云ふ

一梨子破りと云ふ事あり腕を扣へて胸より両方へサツクリと離れ破れるをたとへたるなり

一或る傳に規ひは弓手にあり中りは蹠手にありと云ひて發れの

如何は的中の成否に關ひ中りは發れが最も肝要のものなり
一或る傳に繼子捨といふ事あり是れは發れを惜ます拂ひ捨るの
意にあとへて云ひたるなり

一或る傳に紫の發れと云ふ事あり是れは陽氣の極まる處木体よ
る火体に移りある極意をたとへたるものよて是段を線の位ひ
と云ふ

歌に 一入は薄紅の身なれとも干入になれは紫の色

一村雨と云ふは村雨の露の零る如くはらくと容易に發れ行く
意味をたとへて云ふたるなり翫味すべし是れは喋口も淺く掛け
専ら的前の弱き弓に用ゆべし

一朝風といふも朝風のそよぐにも紅葉の散る如く自然に發るを
云ふ是れも拇指の先の節に弦を掛けたる喋口なり
一老木の晴嵐といふは秋風吹て紅葉の散るにたとへ勢ひ冷まし

く發るゝをいふなり

一或る傳に弦の別れ矢の別れといふことあり弦乃別れとは弦と
喋と別るゝ時喋にも弦よもしらせぬ様に發つをいふ矢の別れ
とは弦と矢と別るゝは弓手の脉所にて別るゝ様に射るへきを
り是れは初心の射人にも分り難し能く修學すべし

一稻葉の露といふは稻穂の露次第々に稻の葉末に昇り穂先さ
撓むまで絶頂に到れば露は地に零ち穂先きは元の如く躍ね返
るを稻穂の別れといふ是れ趣味ある譬へなり總して放れは和
らかなるか如きも左にあらす強の極と知るべし

一五身七道といふ法あり五身は胸の不進不退不仰不屈中央是れ
なり七道は一に胴作り二に足踏三に會取組四に手裏五に弓構
へ六に打起し七に引納の離れ是れなり

一五月雨と云ふことは早苗を養ふ雨露なり乃ち萬民を安んずる

如何は的中の成否に關及中りは發れが最も肝要のものなり
一或る傳に繼子捨といふ事あり是れは發れを惜まず拂ひ捨るの
意にもとへて云ひたるなり

一或る傳に紫の發れと云ふ事あり是れは陽氣の極まる處木体よ
そ火体に移りある極意をたとへたるものよて是段を線の位ひ
と云ふ

歌に 一入は薄紅の身なれとも千入になれは紫の色

一村雨と云ふは村雨の露の零る如くはらくと容易に發れ行く
意味をたとへつゝふたるなり韻味すべし是れは喋口も淺く掛け
専ら前前の弱き時に用ゆべし

一朝風といふも朝風のそよぐにも紅葉の散る如く自然に發るを
云ふ是れも指の先の節に弦を掛けたる喋口なり
一老木の晴嵐といふは秋風吹て紅葉の散るにたとへ勢ひ冷まし

く發るゝをいふなり

一或る傳に弦の別れ矢の別れといふことあり弦乃別れとは弦と
喋と別るゝ時喋にも弦よもしらせぬ様に發つをいふ矢の別れ
とは弦と矢と別るゝは弓手の脉所にて別るゝ様に射るへきな
り是れは初心の射人にも分り難し能く修學すべし

一稻葉の露といふは稻穂の露次第々々に稻の葉末に昇り穂先き
撓むまで絶頂に到れば露は地に零ち穂先きは元の如く躍ね返
るを稻穂の別れといふ是れ趣味ある譬へなり総して放れば和
らかなるか如きも左にあらす強の極と知るべし

一五身七道といふ法あり五身は胸の不進不退不仰不屈中央是れ
なり七道は一に胴作り二に足踏三に會取組四に手裏五に弓構
へ六に打起七に引納め離れ是れなり
一五月雨と云ふことは早苗を養ふ雨露なり乃ち萬民を安んずる

根元なり諸部の曲尺合体して左右相應して矢を保ち發るゝを
いふ

第十六 肩根の事

肩根とは腕付きの肩根の凹き所を云ふ此所高ければ押手弱く且
息合ひ迫るを以て此所に力らを入れて押下け浮かぬ様に注意す
べし引手の肩は引渡し蹠手の肩に来る迄は高く誘ひて曳き取り
肩を前に捻り矢束迄延ひるに従ひ押手と肩と一直線に治るを程
度とす

第十七 弦音の事

弦音は放れの弦に障りなし神氣衛一致に張合ひ充滿し能く整ふ
たると不整頓にて片離れの射方とは乍ら弦音に顯はるゝものな
れば弦音は最も其技術を表するものなり其技術を直接に實見せ
ずして戶外物蔭けより聞きて其射の妙技は弦音にて知らるゝ
ものなれば最も肝要とするものなり

第十八 息合並に調子の事

息合は最も肝要とする所なり或る傳にスムといふことありスム
とは水の濁りの澄む意にて先づ構へて澄むは一段なり又打起
て澄むは二段なり引籠めて手持ちより發つまでに澄むは三段な
り澄むとは息き溜りを静かに吐きて心を澄ますなり目置の傳に
三拍子といふことあり是れ此の三段の拍子遅速なき位ひを云ふ

第十六 肩根の事

肩根とは腕付きの肩根の凹き所を云ふ此所高ければ押手弱く且息合ひ迫るを以て此所に力らを入れて押下け浮かぬ様に注意すべし引手の肩は引渡し喋手の肩に来る迄は高く誘ひて曳き取り肩を前に捻り矢束迄延ひるに従ひ押手と肩と一直線に治るを程度とす

第十七 弦音の事

弦音は放れの弦に障りなし神氣術一致に張合ひ充滿し能く整ふたると不整頓にて片離れの射方とは乍ち弦音に顯はるゝものなれば弦音は最も其技術を表するものなり其技術を直接に實見せずして戶外物蔭けより聞きても其射の妙技は弦音にて知らるゝものなれば最も肝要とするものなり

第十八 息合並に調子の事

息合は最も肝要とする所なり或る傳にスムといふことありスムとは水の濁りの澄む意にて先づ構へて澄むは一段なり又打起して澄むは二段なり引籠めて手持ちより發つまでに澄むは三段なり澄むとは息き溜りを静かに吐きて心を澄ますなり日置の傳に三拍子といふことあり是れ此の三段の拍子遅速なき位ひを云ふ

息合と拍子と位ひと此三つのもの備はらされは種々の病癖を生
すべし

歌に 射手は唯三つの拍子を持って射よ

しらすは常に射をこなふべし

総して息きは平生の通りに呼吸すべし息きの閉塞すれば氣昇り
術盡き諸病を起すものなり紅葉重ねとは弓一代の極意をたとへ
云るなり打起しより次第に重ね々々に終り程強くなるを云ふ息
合も之れより伴れ漸次終る程強く結局は腹に息の盛んに充滿する
様に心得へきなり

一調子は一調子とて水の流れの如く速かなるをよしともしいへど
必らずしも早きをよしといふにはあらず唯諸部の詰め窮りて
氣の充滿したるを程度とすべし諸部の詰め早く整ふと遅きは
其射人の性に依るものなり若し發れの度を過ぎたる時は息き

を抜き換へ二の息き腹の底に充ちたる時放つべし然れども發
れを惜み又た調子滞りて徒らに永きは甚たよろしからず
一三勢といふは 弓勢、矢勢、弦勢の三つの働きの勢をいふ此三つ
の働きは三拍子の整ひて押蹠手の張合ひ強く發れたる出來の
射方の時に生ずる勢をいふ

歌に 息合ひのさとりは道の奥なれや

有無の呼吸は腹の力を

第十九 氣を養ふ事

弓一代の原は心にあり氣にあり的に氣を奪はれぬ第一とす氣は
小蟻大堤を破るといふに在り又高山推車といふことあり是れは
高山に車を押し上る心にてたるめは手前に戻る故へ押し詰めよ

といふ意なり又大日覺王といふことあり是れは大國の王と云ふ
意にて心を大きく高尚に構へて恐れ憚らぬをいふ佛家の所謂
唯我獨尊とは是なり孟子の曰我能く吾か浩然の氣を養ふ又曰く
白から反りて直ならば千萬人と云へども吾往かん亦古語に膽は
大ならんことを欲し心は小ならんことを欲すといふは能く射人
の心膽を鍛練するに適したる語なり弓術は能く神氣を鎮め吾躬
の規矩正整を顧みて敵物を屏呑し勇膽を鼓舞し浩然の豪氣を張
り物に動せず臍の下向きになる様に腹に力らを入れて放つべし
初心の時は諸部の技業を専らに修學すれと技藝に熟達したる後
は唯此の心膽の勇を養ふことこそ肝要なれ平然として外物敵物
をいふに氣を移されざる膽力を養ひ得るときは先づ射術の蘊奥
に達したるなり之を養成する時は唯此弓術の一技に止まらず人
間萬事と應用して物に觸れ事を處するに當り從容自若として如

何なる危急變難に會しても毫も狼狽することなく處理するを得
へし総ての事物に應用窮りなかるべし
一総して手業にのみ氣を費やし腰間をよひ腹底に膽力を失ふと
さえ其弓矢は死して働きを失ふべし最も大切に注意鍛練すべ
さなり
歌に 弓と矢の死ぬる活るは腹と氣の力にありと心得て
射よ
又 手の業て弓をは射るな臍の下氣て射る人を弓を射
る人
又 春楓秋の梢をすさまじき紅葉重ねに嵐吹くなり
一發れんとする時は総体に氣の能く充滿したる極度なり湛へた
る大河の決したる如き勢ひ浩然ならん事を要す
一銚止りの事

鉾止りとは射治めたる跡弓の上下鉾直立線なるへからす拳の
縮り五指に緩みあれば弓鉾左右前後に倒れ傾ふくべし小指緩
るめは下鉾は向ふへ出て矢は高く越へ行くべし甚た悪しきな
り射放したる跡は舩及面弓手馬手共其線は其引渡したる時
の儘に少しも動かす崩れす其形は大山の如く動きなき姿勢な
らざるへからす弓矢の何時離れたるか吾体に知らざる様にな
るへきなり此射治たる跡の体の縮りを見れば其射人の練磨の
力と位ひを知るに足るへき程のものなり是れも諸部の規矩能
く其曲尺に合ひ神氣術一致ならされは必らず其形勢にくるひ
を來すものなり

第二十 鉾打ちの事

射放ちたる後ち其敵物を射止たるや否やを認めて其弓を吾身の
中身の前に上鉾を逆々に倒す時上鉾を軽く打つを鉾打ちといふ
此時弓手は弓の握りを持ちながら左の腰の帯掛け骨の上に拳を
置き馬手は右の帯掛け骨の上に拳を置く是れと全時に左右の足
の踏張りを一所に寄せて直立するなり其形ちは左圖の如し

直立の形



第廿一 退拜の事

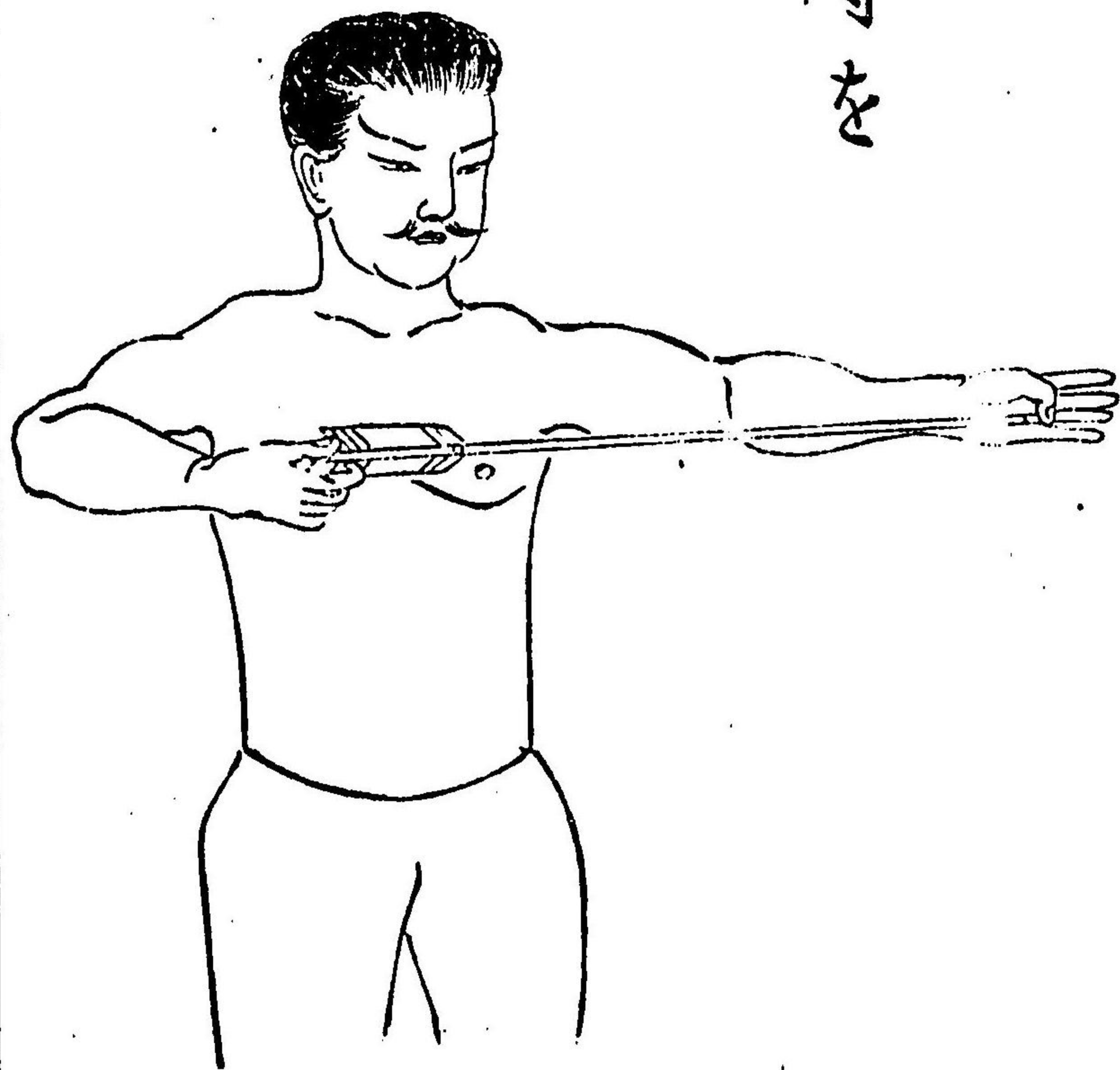
退拜は高貴の人の前にて射る時及禮式射法の時杯に用ゆる禮式なり銚打たる後ち左り足を足一つ程引き左を向きの正面へ向き左り右左りと三足跡に退き少し腰を屈め足を爪立ち尻を鳥渡足の踵の上へに當て直ちに直立して扣へ所へ歸るなり左圖を見るべし



第廿二 矢束の事

一 矢束は各射人の定寸に各長短同しからす其定寸は其人の右の乳に矢の筈先きを當て弓手を延へて高指の端に鏃りの先きを當て比らへたるを定寸とす左圖の如し

第壹法
矢の定寸を
取る圖



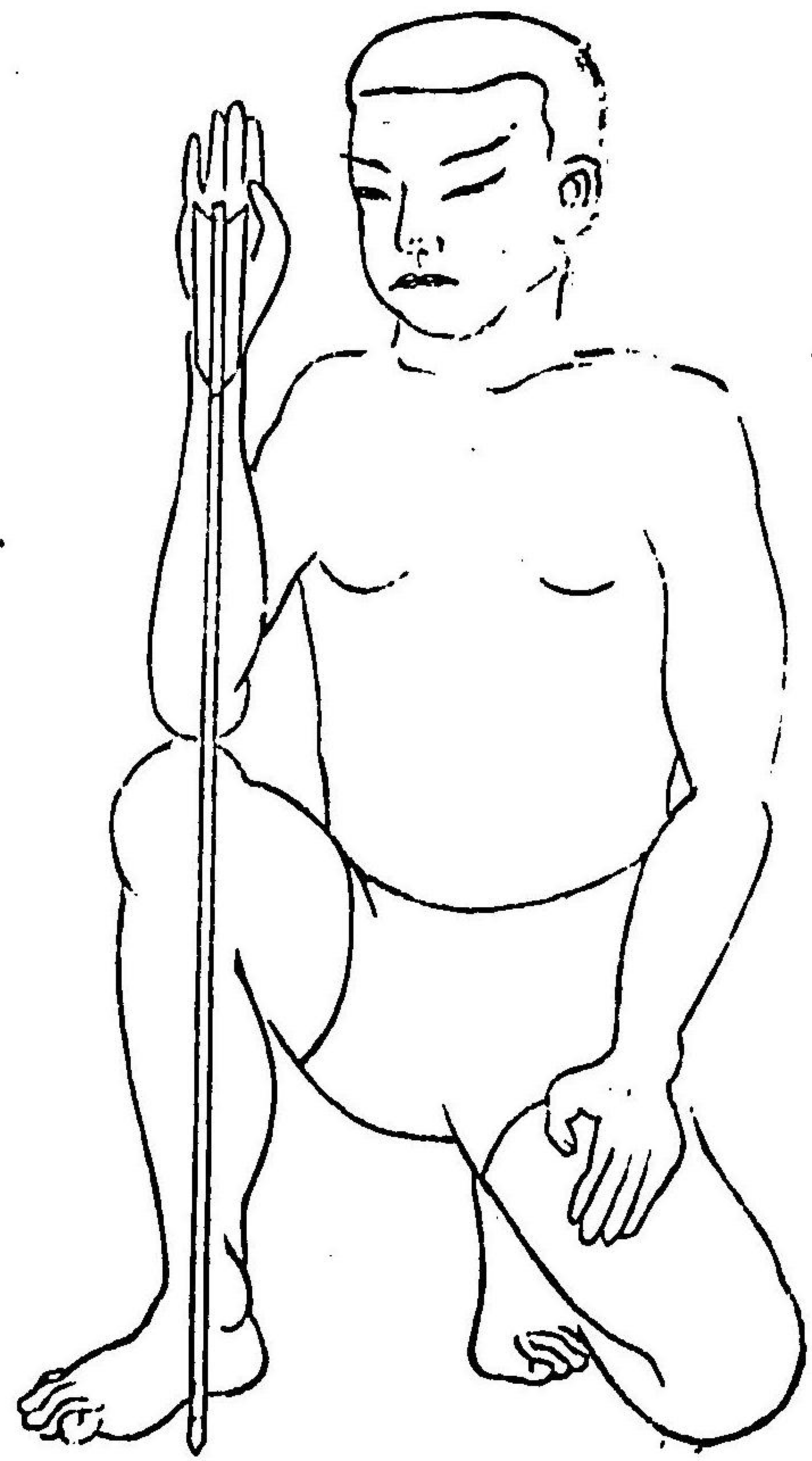
矢の管は
高指と同
寸なるへ
きを挿す
は誤つて
高指の中
節迄に止
む製木後
之を發見
したれば
之を訂正
すへから
す観客之
を了恕せ

又一法は足を立て手の二の腕の脰を膝頭の上に立て指を延へて
高指の爪先きに矢の管先きを當て鏃りを地に付け比べたるを定
寸とす前法と全寸なり左圖を見るべし

第貳法 矢束を定むる圖



矢の管は
高指と
寸なるへ
きを挿
は誤つて
高指の中
節迄に止
む製本後
之を發見
したれは
之を訂正
すへから
す観客之
を了恕せ



矢の管は
高指と
寸なるへ
きを挿
は誤つて
高指の中
節迄に止
む製本後
之を發見
したれは
之を訂正
すへから
す観客之
を了恕せ

歌に 曳く矢束引かぬ矢束よ吾か矢束三つの矢束を心得て射よ

是れは初心の人筋骨延ひ兼ね引け縮み勝ちなれば未だ引くへき矢束を引く矢束といふ引かぬ矢束は八方詰めの定所締らす引き過ぎたるなり是れは後ちに緩むの難を生す吾か矢束とは已か定寸に引き付けたるを云ふ矢束は弓の大事なり弓矢の死生といふ儀あり弓の死生は弓手の内にあり矢の死生は蹠手の納りと發れにありと此蹠手の納り所は乃ち矢束の定寸の處なり

歌に 矢束ほど引きて味はへ心なく
弦にひかるな手にゆひかるな

第廿三 射法直し方の秘傳 的中秘傳

一項 日置の傳に射法は形あり心あり頭目肩臂向背膝足骨筋は形ちを正すべし中り矢走り矢遠矢は心を以て是れを制するなれは精神勇氣を練磨するを修むべきなり射形は初めより其射人の天性に應じて正すへきなり假令へは押手強き人には蹠手を扶くるを教へ蹠手強き人よは押手の張り手の裏の強みを傳へ押手強きとて其れに應じて蹠手を弱くするはあまし其強き方を本として其弱き方を扶けて其強を増加するをよしとす

二項 或る家の傳に初心の時は技業を大形に伸やかに兎角藝の縮小ならぬ様に射させるによつて其間は發れも四寸の形より大切りに手先一排に射さすへきなり

三項 或る家の傳に皮肉骨と云ふは其射人の天性によつて見分るなり骨は上なり少し射形は見へ悪くとも強きなり肉は中なり是れは射形美しけれとも弱きなり皮は下なり射形も悪く

加之弱きなり射方の善悪は其射人の筋骨の組織其天性を識別して其欠点を扶け弱所を補ふべきなり

四項 日置の傳に弓を曳く射手とは弦道にて押手勝ちに蹠手より早く治り両手一致なき射人にて悪し然れとも押手の働き薄き人には之を用ゆるゆへ敢て捨がたしといへり又弦を曳く射人とは此の裏にて蹠手の治り早き人あり是れも恠しけれとも蹠手薄き人に用ゆべしといへり

五項 弓を射る射人とは弓矢を能く制して弓に奪はれざるをいふ是れ神氣術一致したる活体なる射人なり

六項 射ぬ射人とは此裏にて弓に制せらるゝを云ふ弓を制するとして唯強きはかりに射るにはあらず諸部一致すれば弓は已れに従ふものなり

七項 或る家の傳に弓手落る射人又は手の裏弱きか矢着き高き

射人には蹠手の着け遠ふくして射さすべし弓の曲尺といふは打起しに胴と弓とを曲の違はぬ様に射るべし直し方に種々あり顔の反りたる射手には立弓にして射させよ弦にて一度の耳を打ち手を打ちては恐怖心を生し之を避けんとて僻の起るゆへ弦にはかまひなく此時は最も弦強く射さすべし

八項 或る家の傳に矢の掛け合ひといふは矢と弦との曲尺を極むるを云ふ矢下る時は弦の矢止めを下くれは鏃の方上るゆへ矢は越すべし矢上る時は之を高くすれば矢は下るべし

九項 押手の拳に籠摺り強く當る時は筈を上げて番ふべし其病ひ直るべし矢の作りにも掛け合あり假令へは鏃の方輕けれ矢の延ひはあれども中りはなす的矢に用ゆべし又大小輕重にも掛け合あり大き輕きは中りありて延びなし小さく重きは中りなく延びあり左りなから射人にも延びの強くて中りなき人

中りて延ひなき人あり是等を斟酌して矢の拵へをなすべし
十項 日置の傳に肩の高きは弱き故へ直すべし然し生得なれば
直すべからず生得高き肩ならば足踏みを定則より少し廣く踏
ませて射さすべし自然に肩落ち釣合ひ低くなるべし
十一項 肩の落ち過たる射人には(釣合低く蹠手下
た付きなる人)定則より足踏を狭
く踏ませて射すれば肩高く釣合も上るべしとなり又引込み
の時手先の上るは弓に押されて弱みなり又縮むなり相變さど
左右共に丸く等分にあらぬ故なり
十二項 或る傳に弓懐ろ廣き射手には打起の弓構へを後ろへ立
させ蹠手の手首を内へ入させ弓懐ろの加減を取るべし
十三項 弓懐ろ狭き人には弓を前に構へて蹠手を前へ推し出す
べし又小肱の開閉といふは引渡しに拳先開く射人は後ろ筋を
張らすべし拳つほむ人は前筋を張らすべし

十四項 弓手の肩の高き射人は足踏みを廣くして弓構へを低く
し胸は引残す心持ちに射さすべし
十五項 退き付けとて蹠手の拳と肩との間遠く離れて矢束も彎
けぬ人あり是は引渡す時手首にて引くゆへなり肱にて引かす
べし胸前に張り出て体の規矩違ふ故なり是れは押手の肩口を
少し後ろへ残し蹠手の付所を高く射すれば直るべし左する
時は矢束は縮む故能く直りたる後には押手の肩口を入れて延
ばすべし
十六項 蹠の拳肩へ付過ぎ手首屈み手の甲の見ゆるは平付けと
て小臂の返し足らざるゆへなり蹠を捻り右の肩口を折り返す
様に彎かすべし
十七項 又た高釣合にて口割より下らざる射人あり是れは胴腰
の中窺みよなりて背骨のつまり足らす下腹に力ら足らざるゆ

へなり如此は延ひを専らとし身と弓と弦との間に割り込む様に引渡さすれば胴は直まなり釣合も自づから口割り以下に下かるべし

十八項 又た蹠手の付けは規矩に適ふも押手許り釣り上りたる人は押手の上筋強く張らせて射さすれば其癖は直るべし

十九項 又押手の腕を弦にて打つ事あり蹠手の肩捻り足らず弦の近く薄きゆへなり又押の廻り過ぎたる或は蹠手の緩みて張合弱きにもよるべし

二十項 又胸に弦の障る事あり是れは蹠手の平付けにて胴屈むゆへ胸にて弦を迫くゆへなり此直し方は弓懐ろを廣く弦道を大きく少し弓を伏す心にて直るべし

廿一項 小彎きなる射人は多く蹠手の付所低きに在り然れば打起しを高くし少し肱下りに引渡させ背の平骨を下へ詰めて右

肩口の次目を延へ弓手へ押懸けて引渡させて直るべし

廿二項 居付く手先の人は押手の上筋張り足らすべた押になるゆへなり手の裏に空虚なけれを弓を制する活機なきゆへなり然れども受肘曲録肘の射人天性なれば之を用ゆるを適當とするは止むを得ざるなり

廿三項 押の拇指の節を矢にて摺り破るの癖あり是れは弦の矢止めの掛合を上げて矢先下りに掛くれば直るべし又矢音として弓にて摺る音あるも根先下りに掛け合を換れば止むべし

廿四項 初心の時矢枕の漏る事あり引籠む時矢の籠を弓に摺る當つる様に蹠にて保ち引渡させて直るべし

廿五項 初心の時弓の廻り兼ね(弓返り)又握り落す(弓廻て握り皮の上を取る)事あり押蹠手の張合薄く發れと手の裏と二度に發るゆへなり左右の拍子一致する様よ直すべし

廿六項 握り下る射人には押手の小指を締めさせて直ぐべし弓の張りを低く仕換へて射れは手の内の返り早きなり

廿七項 諸落しとて弓手馬手共に切り落す射人あり是れは矢送り損ある故直すべきなり然れども曲録肘或は指肩杯の射人には少し諸落しよて反つて矢送り能きもあり其骨相により或は之を用ゆべし

廿八項 中腰屈かむ射人は両の膝を少し開らき腹を張り出し胸を後へ反らせて弓の銚を馬手の方へ打越して打上げ照り弓にして射させてよし

廿九項 胸を打つ事あらは是れは弓の伏し蹠手の捻ち過るゆへなり弓を照らせて蹠手も少し平付にして射させよ之れにて直らされは蹠手浮付にし繰り身(向ふへ掛る体) 胸構へして射させれば直るべし

卅項 肩高き射人には左の足を前へ踏出し弦道を吾身に近く引かせ射させれば何時となく肩落る様に直るべし又肩落ち過ぎたる人は足踏みを狭くし弓構へを高く押手的の上へを外さぬ様引籠み押手勝手共に矢束引けを締め小臂の返りを緩かに射させれば自然に肩上り能き釣合に直るべし

卅一項 前へ傾き繰り身に前へ押掛り過ぎたる射人は左足を前へ踏出し弓を少し照らして射させれば直るべし

卅二項 左肩出て薄き射人には打起しよ弓懐ろを廣くし引籠むに右肩誘ひ向へ弦道に加減あるべし

卅三項 左肩の入り過ぎ三角身なる射人には弓懐ろを狭く打上げ右足を入れて踏み蹠手肩口落して射させよ

卅四項 矢の出騒く事あり是れは弓手薄く蹠手の勝ちたる片放れ或は矢と弦の掛合のことにもよるべし

卅五項 發れて手先きの上るは蹠手の切り下るか或は押の上筋
緩むかの二つにあり注意すべし

卅六項 發れて押手の落るは未だ三拍子の整はぬ先き早發れと
たるによるべし能く張合ひたるにはなき事初心の時は未だ此
張合の強力をなきゆへ仕方もなく

卅七項 發れ開く射手は小脛の返へしと云ふを知らぬゆへなり
左右の小脛を前へ返し押手は先へ突き發つべし之れに反し蒼
むは其手先きの張合緩むか惣体にて縮むかを見分けて直すべ
し初心の時は發れも切りを用ひす大別れを用ひ射開く形をよ
しとす蒼むは大ひに悪し

卅八項 前押しとして押手のみ發れて前へ出るなり是れは目當て
的の後ろに残りたる時發つゆへ的に合はせんとして自然に押
手を前へ突出すなり是れは鏝りを的の前に押當て發ては押し

開く様に直るべし

卅九項 引過る射手には足踏みを狭くして矢先き高く引籠み押
の奈のみ下けて的に乗せて發さすれば直るべし

四十項 物見(顔のこと)の照りたる射手は左の腰を後へ捻り廻はし
右の耳の下筋を張り込目(眸を目蓋の上につくる)に的を見させ射らばし胸
の反りより生したるは其胸を直すべし

四十一項 弓の立伏とは初めに弓反り後に伏し或は初めに伏し
後ち照るをいふ是れは体と引渡しと合体せざるに在り注意す
べし

四十二項 蹠手の切り大きく鈍く發るは射詰る勢ひ整はざるな
り假令へは形は大きくとも射詰め道に適ひ四寸の發れ整たる
はよし

四十三項 矢の前へ切るは右足を前へ踏み矢の後ろへ切るは

は右足を後ろへ踏み矢上るは足踏みを狭くし矢下るは足踏みを廣くすべし

四十四項 矢の出後ろへ着くは弓の伏すか蹠手の付け遠さか緩み出るか押手肩根抜けるか左の腰の入れ戻るかにあるべし之を見分けて直すべし兎に角是れは押手の返し張り強くすべし又物見にても直るべし矢の出前につくは右の反対にて蹠手の方の勝つゆへ之を能く見分けて直すべし

四十五項 矢の出高く矢越して行くならは是れは退き胸か蹠手附け低さか推手の突張り弱く弓に曳かるるか弦と矢の掛け合に在るかを見分けて直すべし又下り矢の出るは胸の掛け過ぎか蹠手附け高く或ひは緩み浮きたるか掛け合にも依るべし蹠手の肱力らに注意し能く見分けて之を直すべし

四十六項 弓矢の梶といふは矢の出に高下前後の四つあるを云

ふ梶といふは船の梶の取方によりて其方向を自由にするに譬へたるなり蹠手を上へに切れは矢は下るべし下へ切れは矢は越すべし前へ切り出せば矢は後ろへ行くべし後ろへ切れは矢は前へ行くべし

四十七項 押たるみ引たるみとは押たるみは押手を強く推すとのみ思ひ其推し過たるは發るゝ時其推し過ぎたる丈は緩みて放るゝゆへ反つて弱し蹠手も引くとのみ思ひ引き過ぎたるは發つとき戻るゆへ緩み浮きて反つて片離れとなるなり

四十八項 發れぬ癖あり是は引籠み後ち疑惑心起るか爲めなり病的氣を奪はれ中りにのみ心掛け發ち惜みて小膽になりたる病ひの爲めなり此時は臍の下に力らにて切る意を肝要とす的を呑み心を大日覺王に置いて勇膽を以て射るべし或は鞭を以て肱を打つもよし

四十九項 早離れの癖も右に同じき病ひなりの的を外にして引籠み漸次的に當る様にすべし

息合の閑塞せぬ様に胸中の騷搖を鎮むるを主要とす

五十項 付出す放れとは蹠手前に浮出す緩みなり此癖は之を引直すとも再三付出すものなり此時に當つては之を引直すには

心を改め引越しの初の弦道とおもい直すべし是れも的中に心の引かるくゆへ發れを惜むより起るものなり

五十一項 取らるくと云ふは的に氣を奪はれ惣体虚になり眩へ力らの移らさるゆへ弓も取らるくなり是れ早氣病の原因なり

大に注意すべし

五十二項 大槌小槌といふ事あり是れは鍛冶の打つ大小の槌只握り詰めて力ら許りにて打つても其手心のさへて其拍子と合

はされは金鐵を打延はす力ら出ぬものなり弓の押蹠手の拍子

も是れと同ト味ひと心得修むべし

五十三項 日置の傳に緩む射人蹠手と肩口と臍との三つにあり

緩むは心氣昇り上釣合になり重きを失ふ故へなり蹠手と肩口の筋骨の續き外れて其締りを失ふか爲なり

第廿四 初學修學心得の事

弓を學ふには先づ數月の間は卷藁前にて矢數を重ね決して射の姿射らす姿勢稍々備える後ち的を射るべし最初よりの射れは的中の欲心増長し爲めに真正の規矩を失ひ斯術の上進發達を妨害知らす々々の間終に種々の曲癖生じ美形崩れ形となるべし

第廿五 卷葉前の事

卷葉は射形矯正の爲に設けたる法のものなれば初學の人は専ら規矩法則を正し居止動靜を整へ姿勢の美形を備へて後ち的を射るべし

但し的前及卷葉共に徒らに一矢を發つべからず戰陣に在つて敵に向ふの心にて一矢を誤まれば死生の關かわるものとし一射を大事に心得て射るべし漫りに百發千射するも一射を眞正にするの勝れるに如かず

第廿六 的前の事

的を射るには一射を大事にして吾躬の諸部の正整を願み射の本

体を失はされは必ず的中するものなり然れども射人多くは的中の慾心に氣を奪はれ吾技の正鵠を失ひ終に一發たも満足に完全なる發射を得難し能く此難所を豪膽に強行し得ば豈に百發百中の地位に到ること能はさるの理あらんや

但し平素射る的は一尺貳寸或は八寸六寸を適度とす之れより以下の小的を射るはよろしからず小的は的中の欲心を養成し且は技術縮小に傾き心膽を小弱になるべし

○大的を射るには其技の整はぬ内乍ち的に鏃りの規ひは的に入る漠然となり射外すこと多し故へに大的を射るは心を小にし鏃目の星の眞中に能く押し當て發れを永く保ちて射るべし
○小的を射るには氣詰り業縮み容易に的の鏃目の星に規ひの入らざるゆへ調子永きに失し術盡きて射損すること多し故に的の外に壹尺許りの無形的を心に畫き其的に對すれば心技の畏

縮を免るべし

第二十七 弓程の事

弓の強弱は射人の力らに應じて用ゆへし其相當より少く弱く覺ゆるを用ひてよし矢數を射れば手力心氣疲れて後には強くなるべし吾力より強きを用ゆれば之を制し得ずして反つて弓に射らるべし然れども其射人の技術進み矢數を重ねれば其力量は漸次増加するを以て強弓を執て之を制し得るに至るべし

第二十八 矢程の事

矢の定寸は先に著はらたり其矢の大小輕重は弓の強弱に従ひ用

ゆべし

弓強くして矢小さく輕きは矢をれて中り込まぬなり矢大きに過るもあはれけれとも中りには害なし弓及弦の冷へぬものなり矢は筈の方重きは矢行き延ひあれとも中りなれ鏃の方重きは延ひなけれとも中りに得あり

○弓の握りの所力抜けて弱き弓は矢行き下り手の内冷へぬなり握り強きをよとす

○大中弱く乙腰立ちて強き弓は矢上る方なれとも手の内鈍し

○乙腰弱く大中強き弓は手の内早けれとも矢下る方なり

○新弓は矢數を掛るに從ひ其弓形の換る故其弱き所を扶けて引立て強き所を足にて踏み弱めて其形を直すべし又左右の振りは弦を弓の内竹の中央通りに見通し其出入りあらは押と直すべし否らされは其弱き所は益弱く強き所は尙強きを増し其出

入りの振りも尙増加して弓形り悪くなるべし

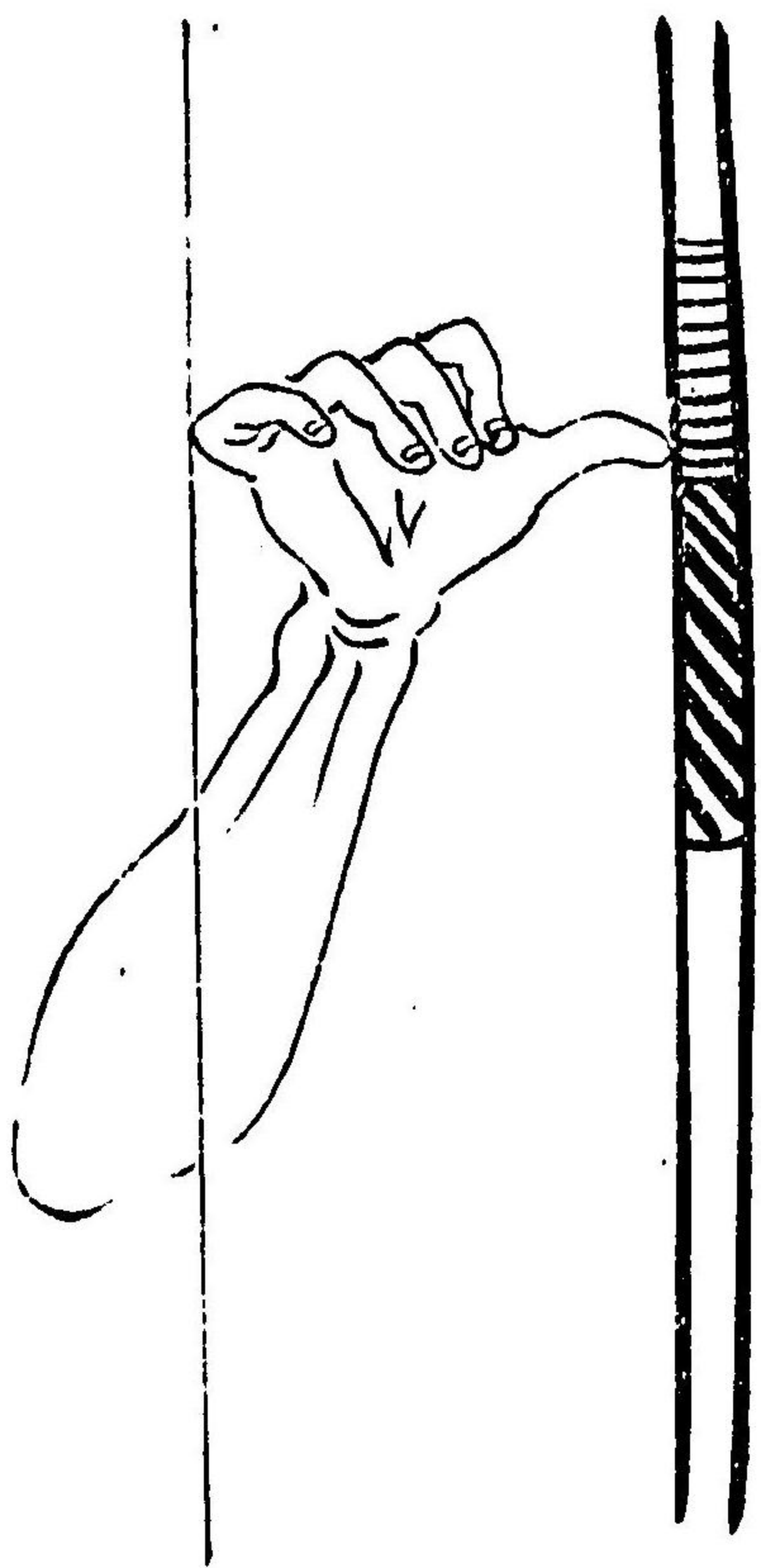
○其踏み直し様は下の圖を見るべし



第廿九 弦程の事

弦の張りの高低は弓の握りと弦との間の距離をいふ此張りの定度は三指を曲げ拇指を延べて一排に開き小指も曲けて股を開らき弓と弦との間を計りたるを度とす其定寸より張り廣さを張り高さと云ひ狭さを張り低さといふ左圖を見るべし

鞞手の形



第三十 躰の事

躰は初學の人は帽子柔かなるを用ひ上進すれば堅帽子を用ゆべし帽子柔かなるは放れ力らなし弓強くなれば矢數を重ねる時は拇指の痛みを生ずるか故へなり

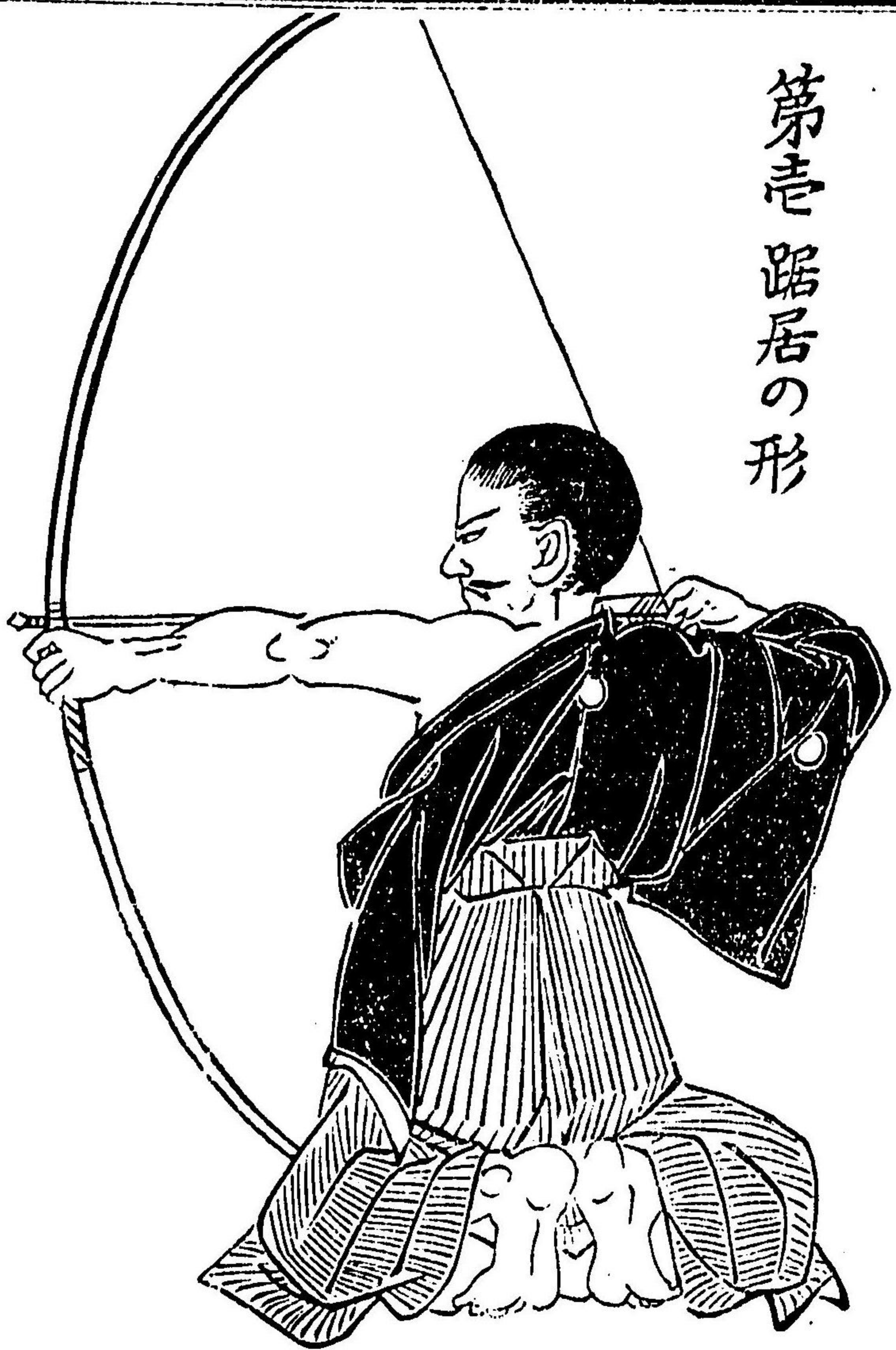
○鞞け口は弓弱ければ淺く搦み弓強ければ深く搦むべし而して流れざる様に一文字に掛るをよしとす

但し拇指の裏面に斜めに掛けたるを流るくと云ひ垂直に掛けたるを一文字と云ふ

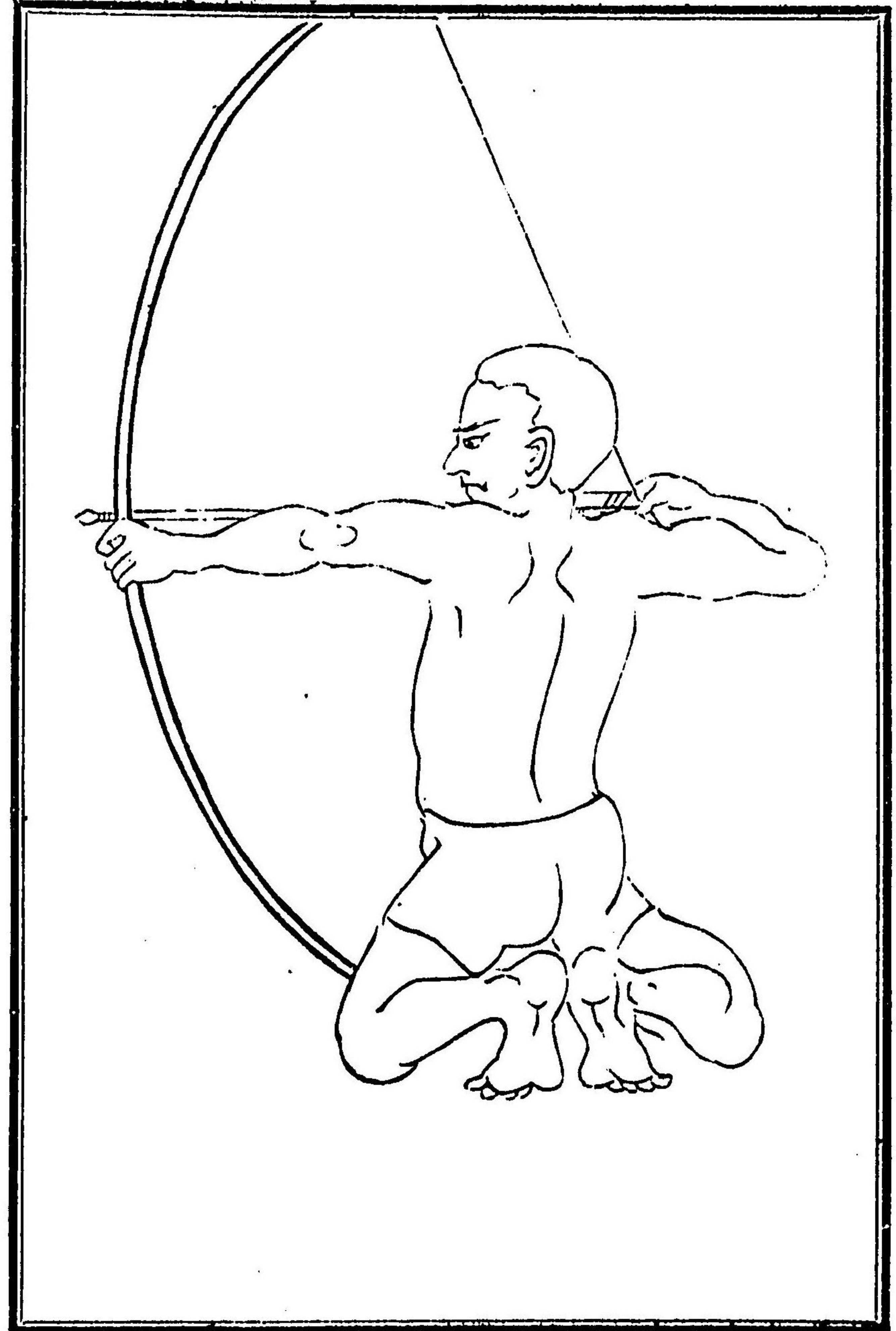
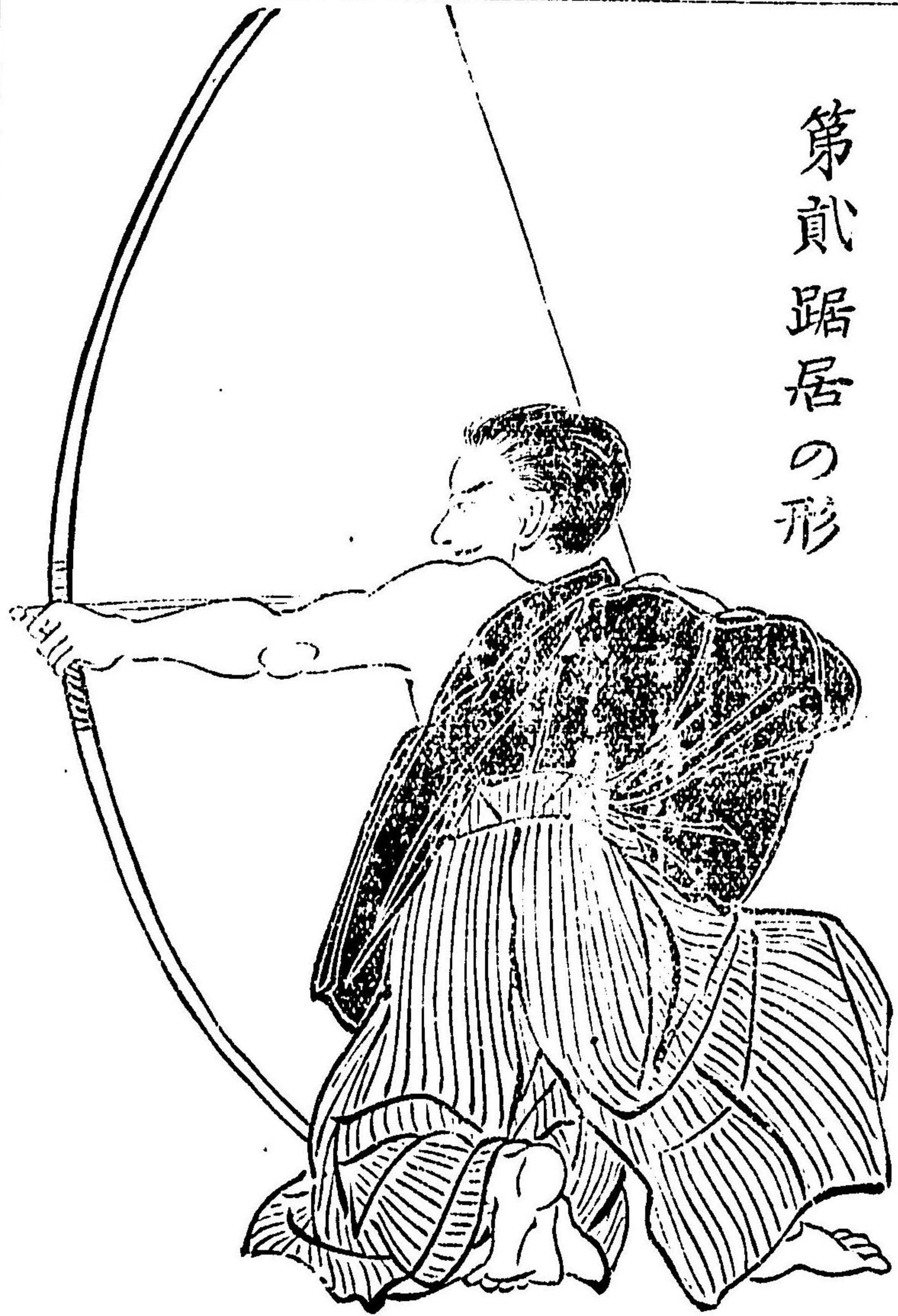
第卅一 跪居射法の事

立前へ射方を上段とし跪居射方を下段と云ふ跪居は双の膝を曲
け地に附け足の踵を立て射るを云ふ総ての射方上段の立前に異
なることなり左圖の如し

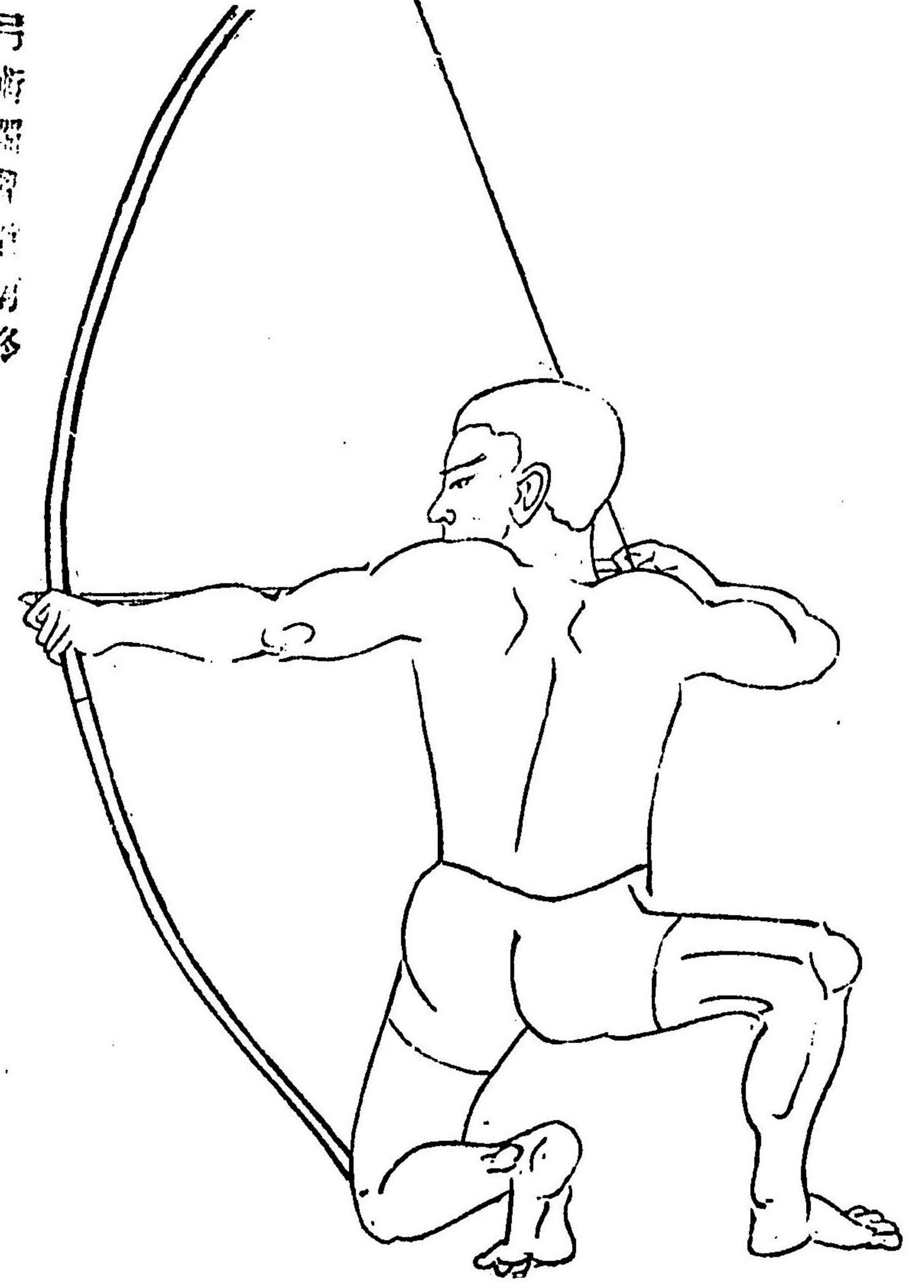
第卅 跪居の形



第貳 踞居の形



弓術獨習指南終



明治卅六年十月卅一日印刷
明治卅六年十一月七日發行

正價金卅五錢

福岡縣福岡市博多上祇園町拾貳番地

編輯者 南川正雄

同縣同市吳服町叁番地

發行者 龜田滿吉

同縣同市因幡町五番地

發行者 林虎太郎

同縣同市妻巴町四拾貳番地

印刷者 山田純一郎

同縣同市橋口町六拾四番地

大賣捌所 相川錠吉

免 關 許 權

187
286

三池町	大牟田	比良松	熊本	飯塚	馬關	門司	同倉	小倉	同米	久留米	同岡	福岡	同	同	博多
跡部萬藏	上野萬藏	田中圓	長崎次郎	田淵八次郎	重野集文	飯田虎	中嶋書	辛嶋書	田中書	菊竹書	江藤正	植木利三	眞海書	積善書	森岡書
藏助	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎	助郎
周船寺	前新原	西新町	直方	若松	田川郡	同保	佐世島	宇ノ島	同津	中津	大分	佐賀	長崎	鹿兒嶋	
富田書店	大浦喜六	吉田延三	宮田岩次郎	石松書	加來	野口書	青雲書	常徳屋書	梅津春平	野依曆三	甲斐治平	河內壯助	安中三郎	吉田幸兵衛	

